

ローマ生まれの救世主

——ゴージェ・ダラス『エラクル』を読む——

根津 由喜夫

I はじめに

歴代のビザンツ皇帝の中でも、ヘラクレイオス（在位 610–641）¹ ほど西欧で好意的な世評を得た人物は他にあるまい。20 世紀ビザンツ学の泰斗ゲオルグ・オストロゴルスキーが、この皇帝を、中期ビザンツ国家の国制の基礎を築いた改革者として高く評価したこと²はよく知られているが、それよりも数百年も前から、西欧の人々は同帝の事績に賛辞を呈してきたのである。

それは何よりも、ササン朝ペルシアの軍勢がイェルサレムから持ち去った「真の十字架」を彼が奪回し、再び聖都に十字架を奉還する、という偉業を達成したからに他ならない³。9 世紀のラバヌス・マウルス以降、多くの教会人が説教集にこの事績を収め、9 月 14 日の「十字架頌揚」の祭日は、「真の十字架」を掲げたヘラクレイオスのイェルサレム凱旋と結び付けられて広く祝われたのである⁴。後代の西欧人が、ヘラクレイオスのペルシア遠征と、「真の十字架」奪還に象徴される彼の勝利を、その後の十字軍運動の先駆けとして位置付けたことも彼への共感を高めることになった。十字軍運動の展開と聖地の十字軍国家の歴史を著したティルス大司教ギョームは、彼の年代記の冒頭に、614 年のイェルサレム陥落とそれに続くヘラクレイオスの功業を簡潔に語り⁵、その年代記の仏訳や続編はしばしば『エラクル（＝ヘラクレイオス）の物語』*L'Estoire de Eracles* の名で知られている⁶。彼を「最初の十字軍士」と位置付ける解釈は現代にまで継承されているのである⁷。

他方、ギョーム・ド・ティルが「ローマ皇帝ヘラクレイオスが帝国を治めていた時代…」と書き起こしていること⁸に端的に認められているように、これらの西欧の著述家たちは、この皇帝の生い立ちはもとより、彼が皇位に昇った経緯すら全く関心を示さないのが通例である。彼らの関心は、失われた「真の十字架」の奪還という事績に集中しており、異教徒に対する「十字軍」遠征に乗り出す以前のヘラクレイオスに関して言及されることはほとんど皆無と言ってよい。

そうした中で例外的にこの皇帝の前半生に関心を寄せた作家がいた。本稿で取り上げるゴージェ・ダラスがその人である。彼は、後述するごとく、この英雄の出生から少年時代、そして長じてコンスタンティノープルの帝位に昇った後の功業に至るまで、その知られざる生涯を詳細に描き出している。

ただし、そこで彼が用いているのは、我々が一般に伝記作家に期待するものとは全く異なる手法であった。通常、何らかの歴史的人物の伝記を著すためには、当該の人物に関して、できるだけ多くの資料を収集し、信頼に値する情報を精選して彼の人生を再構成することが求められるだろう。ところが彼はこうした作業はまったく行っていないのである。その代わりに彼は、

その多くが東方起源と思われる多くの説話や伝承を集め、それらをパッチワークのように巧みに繋ぎあわせることで、ひとりの英傑の人生絵巻を紡ぎ出してみせた。その意味で彼の作品は、厳密に言えば、皇帝ヘラクレイオスという歴史上実在した人物の「伝記」ではなく、特にその前半部分に関しては、この皇帝に仮託された全くの虚構の物語、作家ゴーティエの純然たる「創作」と言うべき作品なのである。しかし、史実に照らしてこの作品の内容が荒唐無稽だからといって、それが歴史研究の視点から無価値かといえ、必ずしもそうではあるまい。詳しくは後に譲るが、この文学作品を、それが成立した時間と空間の中に位置づけてみると、最初は一人の作家の夢の産物にしか見えなかった作品の背後に広大な歴史的眺望が広がっているのを、我々は眼にすることができるのである。だが今は結論を急ぐまい。以下では順を追って、最初に作者と作品について基本的な情報を確認し、ついで『エラクル』の筋立てと挿話の典拠を究明した上で、この作品と歴史との接点を探求する作業に取り組むことになるであろう。

Ⅱ 作者と作品

『エラクル』⁹の作者について我々に知られるところは、同時代の他の作家同様、多くはない。彼が「ゴーティエ・ダラス」の名で自らを呼んでいるのも、現存する彼のもうひとつの物語作品『イルとガルロン』の中で1度きりである¹⁰。ともあれ、そのことによって、彼が北フランス、アラスの町の出身であるか、あるいはその町の居住者であることが知られるのである。

彼を、アラスの城代の家系に属し、フランドル伯フィリップ・ダルザスの重臣だった *Gualterus de Atrebat* (ないし *Atrebatensis*)¹¹ (ゴーティエ・ダラスのラテン語形) という人物と同定しようとした F.A.G. クーパーの学説¹² は、今日ではほとんど支持を得られてはいない。A. フーリエが言うように、ゴーティエという名前はありふれており、アラスの町出身 (あるいはその町に居住する) 同名の人物などそれこそ掃いて捨てるほどいたと思われること、そして何よりも、彼の作品のあちこちに認められるパトロンの気前よい振る舞いを期待する口ぶりに、どう見ても大身の貴族よりも、著作を貴人に献呈して見返りを求める職業的な文筆家の心性が認められるのがその理由である¹³。

『エラクル』の記述から、著者は聖書を初め、多くの宗教関係の著作に親しんでいたことが推定されている。おそらく彼もまた、同時代の偉大な作家クレチアン・ド・トロワと同様、教会人としての学業を積んでいたものと思われる¹⁴。他方、もうひとつの彼の作品、『イルとガルロン』からは、彼が同時代の世俗文学 (武勲詩、マリー・ド・フランスの短詩、古代風ロマンなど) に通じていたことが窺える¹⁵。

『エラクル』の写本は、今日、3種のそれが残るのみ¹⁶ だが、13世紀の聖母の『奇蹟集』の序文¹⁷ に、ゴーティエがクレチアン・ド・トロワらと並んで「立派な吟唱詩人」(*bons ménestrels*) と評され、同じく13世紀にドイツで『エラクル』の翻案作品が成立していること¹⁸ などを勘案すれば、この作家が同時代の人々にそれなりに高い評価を受けていたことが推

定されるのである¹⁹。

彼の作品の成立年代は、そこに言及されているパトロンたちの顔ぶれから、おおよその見当をつけることができる。『エラクル』は、ティボー・ド・ブロワ（ブロワ伯ティボー5世、在位1152-1191）とマリー・ド・シャンパーニュ（仏王ルイ7世とアリエノール・ダキテーヌの娘、シャンパーニュ伯アンリ1世の妃）の求めで執筆され、ボードゥワン・デノー（エノー伯ボードゥワン5世、在位1171-1195）のために仕上げられた。このことから、この作品は、マリーがシャンパーニュ伯に輿入れした1164年を遡るものではないことが分かる。一方、ゴーティエのもうひとつの作品『イルとガルロン』はドイツ皇妃ベアトリクス・ド・ブルゴーニュ（皇帝フリードリヒ1世バルバロッサの妃）の依頼で着手され、ブロワ伯ティボーのために仕上げられている。それゆえ、作者が『イル』に着手したのは、ベアトリクスが皇妃として戴冠された1167年8月1日以降ということになる。

一般に中世の詩人は特定の大諸侯の保護下に入り、後者に専従的に奉仕する存在と考えられていた。ところがゴーティエの作品には複数の庇護者が登場し、しかもブロワ伯は『エラクル』の着手と『イル』の完成に関与するなど錯綜した様相を呈している。そのため、作家がどのような順番で奉公先を変更していったのか、多くの学者たちが頭を悩ませる結果となった。

これに対してA. フーリエはそうした通念が混乱の原因であるとして、発想の転換を唱えている。彼は、詩人は常に大貴族の宮廷に逗留していたわけではなく、むしろ、ごくたまに、祭典や多少とも盛大な集会在催されるような機会に彼らの許を訪問したのではないかと考えているのである。そのような集会を想定すれば、詩人がブロワ伯ティボーと彼の義姉マリーから同時に作品執筆を依頼される一方で、伯の妃でマリーの妹でもあるアリクスへの言及がないのも合点がいく、というのがフーリエの見解である。また、詩人は大貴族のパトロンから生計費を得ることで、彼の家門に帰属する場合においても、パトロンの合意の下で、あるいはその依頼に基づいて、後者の親族や友人のために作品を執筆するのは充分ありえることであった、とフーリエは語っている²⁰。このような考えに従えば、ゴーティエの活動は、主としてブロワ・シャンパーニュ家の宮廷、とりわけ彼の2作品のいずれにも言及され、その気前よさが賛美されているブロワ伯ティボーのその周辺で展開されていた、と見て大過ないだろう。

残りの2人のパトロン、ドイツ皇妃ベアトリクスとエノー伯ボードゥワン²¹も、シャンパーニュ伯家との間に様々な接点を有していた。

ベアトリクスは、旧ブルグンド王国の流れを引き、リヨン、ヴィエンヌ、ブザンソンなどを版図に収めるブルゴーニュ伯家の相続人である。彼女の父、ブルゴーニュ伯ルノー3世（在位1127-1148）の姉妹エリザベトは、シャンパーニュ伯ユーグ1世（アンリとティボー兄弟の大叔父）に嫁いでいたから、彼女とシャンパーニュ伯家は縁戚関係にあった。両家の結び付きは、後にベアトリクスとバルバロッサの息子でブルゴーニュ伯領の相続人に指定されたオトン（オットー）とティボー伯の娘マルグリットが1192年に結婚したことでさらに強化される。

一方、エノー伯ボードゥワン5世は、1169年にフランドル伯フィリップ・ダルザスの姉妹マルグリットと結婚して以来、シャンパーニュ伯家に接近することになった人物である。ボード

ウワンとマルグリットの間には 1170 年と翌年、相次いで子供が生まれると、フランドル伯フィリップは、シャンパーニュ伯アンリの子供たち 2 人との二重結婚を斡旋した。1179 年 5 月にはボードウワン自身がトロワのシャンパーニュ伯の宮廷を訪れ、婚約の再確認が行われている。

さて、それではゴージェが彼の 2 つの作品を執筆するにあたり、これら 4 人のパトロンたちと、どのような局面で関係を結んでいったのであろうか。この点に関して、フーリエの研究を参照しながら考察してみよう。

『イル』の写本には、『エラクル』への言及が認められるので、『エラクル』が『イル』に先行して執筆が開始されたのは間違いない。また、作品の序文と結びで献呈先の人物が異なること、作者のゴージェが『エラクル』の半ば (v.2909-2914) で計画を最後まで遂行するのに不安感を表明していること、2 つの物語の筋立てに類似性があること、などを勘案すると、両作品の執筆期間は互いに重複、継起していた可能性が高いと考えられる。そうした前提において、作者とパトロンたちの出会いの場として想定できる出来事を歴史の中で探しながら、フーリエは以下のような仮説を提示する²²。

1174 年の復活祭にイングランド王ヘンリー 2 世は妃のアリエノールを幽閉する。王妃の幽閉は 1189 年まで続いた。『エラクル』には夫である皇帝によって皇妃が塔に監禁される挿話が収められているが、少なからぬ研究者が、作者はこの事件からその着想を得た可能性がある、と考えている。いずれにせよ、このショッキングな出来事は西欧各地の宮廷で話題に上ったであろうことは想像に難くない。

1176 年 8 月から翌年 4 月にかけてプロヴァンのシャンパーニュ伯の宮殿で、一門の主要人物を集めた大規模な集会が開催された。そこでは、伯のアンリ 1 世と伯妃マリーに加え、伯の兄弟であるブロワ伯ティボーと大司教「白い手」のギョームが一堂に会した。フーリエは、伯妃マリーとブロワ伯ティボーによってゴージェに『エラクル』執筆が求められたのはこのときではないか、と推定している²³。

翌 1177 年 9 月 21 日、教皇特使の仲介でイヴリーにおいて仏王ルイ 7 世と英王ヘンリー 2 世が会見、両者の和解と十字軍遠征の準備に着手することが取り決められた。英王の長男ヘンリーとブロワ伯ティボー（兩人とも仏王の娘婿であり、またブロワ伯は王のセネシャルでもあった）とルイ王の弟ロベール・ド・ドルーとピエール・ド・クルトネーの立会いの下で進められたこの会見は、十字軍の出陣に向かう熱気に包まれていたことだろう。すでに同年 5 月にはフランドル伯フィリップが軍勢を率いて聖地に向かっていた。こうした雰囲気、異教徒への聖戦を称揚する『エラクル』の執筆を促すことになったのである。しかし、結局、英仏両王の十字軍はこのときには実現することはなかった。それと歩調を合わせたように『エラクル』の執筆も、一時中断したらしい。

というのも、イヴリーの会見のおよそ 2 ヶ月前の 7 月 24 日、ドイツ皇帝フリードリヒ・バルバロッサがヴェネツィアにおいて教皇アレクサンデル 3 世と和平を締結して、長年にわたるイタリア問題にひとまず決着を付けると、ゴージェには新たな作品執筆の依頼が舞い込むことになったからである²⁴。

翌 1178 年 7 月半ば、ドイツ皇帝夫妻は滞在先の北イタリアを出発し、以後 2 ヶ月にわたりゆっくりと南から北へ皇妃の故郷ブルゴーニュ伯（旧ブルグンド王国）領を巡行した。7 月 30 日、アルルの聖トロフィーム聖堂で、バルバロッサは古式に倣って「ブルグンド王」としての戴冠式を行う。その後、一行は、アヴィニョン、オランジュ、モンテリマール、ヴァレンスと北上、8 月 15 日の聖母被昇天祭に北の王都ヴィエンヌにおいて今度は皇妃ベアトリクスがブルゴーニュの冠を授けられた。それは、夫であるフリードリヒから彼女へのブルゴーニュ伯領の自治特権、すなわち、彼女が 1184 年 11 月に死去するまで行使し、その後は 2 人の四男オットーが引き継ぐことになっていた特権の付与を確認する行為であったと考えられる。

その後、一行はリヨン（8 月 19-20 日）を経て北上を続け、ドール（9 月 6 日）を通過して同 13 日にはベアトリクスの父の本拠ブザンソンに到着、9 月中、同地に滞在して盛大な諸侯会議を開催した。ブザンソン大司教、メッスとジュネーヴの両司教、マグデブルクの城代など多くのドイツ諸侯が参集したこの会議には、皇妃の遠近の親類縁者たち、とりわけブロワ・シャンパーニュ家に連なる人々も姿を見せていた。シャンパーニュ伯アンリ 1 世、彼の弟でランス大司教のギョーム、彼らの甥のブルゴーニュ公ユーグ 3 世などがそれである。ブロワ伯ティボーはこれには参加していなかったらしいが、フリーエは、ゴートィエがランス大司教、あるいはなかなずくアンリ 1 世の随行者に加わって、この機会にドイツ皇妃の知遇を得て、彼のパトロンたちの合意の上に彼女のために作品、すなわち『イルとガルロン』を著すことを引き受けたのであろう、と想像する²⁵。

翌年の 1179 年 5 月 13 日、前述したようにエノー伯ボードゥワン 5 世が彼の 2 人の子供をシャンパーニュ伯家の 2 人の子女と婚約させる協定を確認するためにトロワの后者の宮廷を訪問した。ゴートィエがエノー伯から『エラクル』を完成させるよう求められたのはこの機会においてであった、とフリーエは想定している。この時期、シャンパーニュ宮廷では、再び十字軍の機運が盛り上がっていたのである。この会合の後、シャンパーニュ伯アンリ 1 世は、王弟ピエール・ド・クルトネーおよびボーヴェー司教フィリップ（王弟ロベール・ド・ドルーの息子）と共に十字軍に出陣する。

その後、アンリ伯は聖地からの帰途、小アジアでトルコ人の捕虜となった。彼はビザンツ皇帝マヌエル 1 世の身代金支払いによって自由を回復し、1181 年 3 月 10 日に帰国を果たしたものの、すでに健康を害していたために 3 月 16 日から 17 日にかけての夜半に逝去した。伯が聖地から持ち帰った「真の十字架」の聖遺物を安置するため、それまで聖母に捧げられていた宮殿附属礼拝堂が「聖十字架」礼拝堂と改名されたこと²⁶ は、ヘラクレイオス帝の「真の十字架」奪還の挿話との関連性から記憶にとどめておいてもよいだろう。

伯の死からおよそ 2 ヶ月後の 5 月 14 日、プロヴァンの町にブロワ・シャンパーニュ家の一門が参集した。ここには、王太后アリクス（故アンリ伯の姉妹、仏王フィリップ・オーギュストの母）、伯妃マリー、ブロワ伯ティボー 5 世、その兄弟のランス大司教ギョーム、同じくサンセール伯エティエンヌ、さらに彼らの甥にあたるブルゴーニュ公ユーグ 3 世やバル・ル・デュック伯アンリ 1 世が顔を揃えていた。さらにフランドル伯フィリップ・ダルザスとエノー伯

ボードゥワン 5 世もこれに加わり、以前に確認されていたシャンパーニュ家とエノー家との間の二重結婚の約定が、仏王フィリップに嫁いだイザベル・デノーに代えて妹のヨランドを立てるという修正を施した上で再度、確認された²⁷。ブロワ・シャンパーニュ家とフランドル・エノー連合の連携が再確認されたこの時期以降であれば、たとえゴーティエがエノー伯ボードゥワンに奉公先を変えていても、元の主人のブロワ伯ティボーに作品を献呈するにも何の支障もなかっただろう、というのがフリーエの見立てである²⁸。

1184 年 5 月 20 日の聖霊降臨祭、皇帝フリードリヒ・バルバロッサはマインツで盛大な帝国会議を開き、ドイツ各地とブルゴーニュ伯領から 7 万の騎士がこれに参集したと伝えられている。このとき、エノー伯ボードゥワンは皇帝の太刀持ちを務めるという荣誉に浴した。皇后ベアトリクスにとって、これが彼女の臨席した生涯最後の盛大な集会となった。彼女はこの年の 11 月 15 日、およそ 40 歳で世を去るのである。フリーエが推測しているように、当時、ゴーティエはエノー伯の配下に属していたとしたら、この 1184 年の帝国会議は、彼がかつて皇妃に執筆を求められていた『イルとガルロン』を捧げる絶好の機会になったはずである²⁹。

以上の考察を作品の執筆時期とパトロンたちの関係を軸に整理すると次のようになる³⁰。

1176 年から 77 年（プロヴァンのシャンパーニュ家一門会議）にかけてゴーティエは、ブロワ伯ティボー 5 世とシャンパーニュ伯妃マリーの勧めで『エラクル』の前半部を執筆する。次いで 1178 年 8 月、ブザンソンにおいて、ゴーティエは、すでに着手していた『イルとガルロン』を書き進めるよう皇妃ベアトリクスに求められた。その後、作家はエノー伯ボードゥワン 5 世に促されて、1179 年から 1181 年頃までに一時中断していた『エラクル』を仕上げ、さらに 1181 年の皇妃ベアトリクスの死までには『イルとガルロン』も完成させた。フリーエは、1179 年頃にゴーティエがエノー伯へ奉公先を改めていたとしても、かつての主人の恩顧を忘れず、『イル』の 1 写本をブロワ伯に送ったのだろう、と考えている。

このように見ると、ブロワ・シャンパーニュ家に連なる 2 人のパトロンの発案に基づく『エラクル』は、同家の意向を反映し、一方、イタリアの支配をめぐって、すでに同地を支配するドイツ・ローマ皇帝権とそれを軍事的に脅かすギリシア皇帝権との対決が主要なプロットを成す『イルとガルロン』は、ドイツ皇妃ベアトリクスの意に沿ったものだったことが窺えるかもしれない。この点に関しては、後にもう一度、振り返る必要があるだろう。

Ⅲ 物語の概要

本格的な考察に入る前の予備作業として、ここで『エラクル』の筋立てをごく簡単に要約しておきたい³¹。先にも述べたように、この作品は皇帝ヘラクレイオスの伝記の体裁をとるが、皇帝即位以前の彼の前半生の部分は、古今の説話を繋ぎ合わせた作者ゴーティエの全面的な創作に他ならない。この作品の構成に関しては、主人公の皇帝即位を境に前半と後半の 2 部構成と見る見方と、前半部をさらに 2 分して 3 部構成とする説とが並存しているが、以下では議論

を整理するのにより容易な後者の流儀に従って、この物語の筋を追うことにしよう³²。

(1) 主人公の誕生と試練

物語の前半は、ティベル川の畔のローマの町で展開する。

元老院議員ミリアドス Miliados とカッシーヌ Cassine は敬虔の念厚く、高潔で仲睦まじい夫婦だったが、結婚して7年を経てもまだ子宝に恵まれていなかった。子を願う夫婦の祈りに神は応え、カッシーヌの許に天使を送って懐胎に必要な手筈を告げさせた。それは、床に豪華な敷物を広げ、その上を絹織物で覆った上で、最も美しく見事なマントに包まって夫婦の契りを結ぶというものであった。指示に従った夫婦にやがて男の子が生まれる。両親はこの子を当初、Dieudonné と命名した。その名は「神の贈物」を意味し、この子が生まれながらにして神に選ばれた存在であることを強く示唆するものであった³³。

赤ん坊が洗礼を受けた 2 日後、神は再び天使を派遣して、嬰兒の揺籠に手紙を届けさせた。その手紙は、生まれた子供に宛てられており、表書きに彼が十分にそれを読める年限に達するまで開封しないようにという厳命が付されていた。6 歳までに十分な学業を積んだエラクルは、保管されていた手紙を開き、神が彼に宝石、馬、女性の真価を見抜く能力を授けたことを知る³⁴。

エラクルが 10 歳のとき、父ミリアドスが世を去った。母親のカッシーヌは夫の魂の安息を得るために全財産を処分して修道院を建立、残りの財貨は貧しい人々に分配された。さらに彼女は究極の犠牲を払う行為として、本人の合意を得た上で最愛の息子を市場で奴隷として売り払うことを決意する。

市場でエラクルは前述の 3 つの能力があることを申し立てて、皇帝のセネシャルを説得し、1000 ベザント³⁵ という高値で自らを買い取らせることに成功する。母親は受け取った代価を残らず貧者に分配した後、自分が建立した修道院に隠遁した。

宮廷に戻ったセネシャルは、子供の口車に乗せられて大金を失ったと人々に揶揄され、物笑いの種にされた。それを耳にした皇帝はセネシャルを呼び、直ちにその少年が有していると称する能力を証明して見せるように命じる。

最初に問われたのは「宝石」の真価を見極める能力である。皇帝は布告を発し、次の火曜に市を開くこと、ローマとその周辺に住み、宝石を所有する者は所持する宝石を残らず出展すべきこと、を命じた。市の当日には夥しい数の宝石が店頭に並び、中には「トゥールーズの全ての黄金」(v.797) に匹敵すると値踏みされた高価な宝石も含まれていた。皇帝の命を受けたエラクルは一軒一軒、露店を巡って並べられた宝石を吟味したが、最後に、何の取り柄もなさそうなみすぼらしい石を彼は選び出した。しかも、彼は、売り主の 6 ドゥニエという言い値を無視して 40 マルク³⁶ という法外な代価を支払ってそれを買取ったのである。

その知らせを受けた皇帝は驚き、呆れ、慨嘆する。

「何ゆえにお前は余の金でこんな価値もない石を買い入れたのだ。そして何故にお前はそれに 40 マルクも支払うというとんでもない取引をしたのだ。どうやらお前は、お前の身

柄と引き換えに 1000 ベザントも支払ったお前の主人のセネシャルと同じ不幸を余にも味あわせたかったようだな。何たる悲しみ、まったく何たる不幸なことだ！」(vv.899-906)

これに対してエラクルは、この石にはその持ち主を水、火、武器の打撃から守る不思議な力が秘められているのだと皇帝に言上した。皇帝は早速、身をもってその発言を証明してみせるようにエラクルに迫った。

件の石を首に下げたエラクルは石臼に縛り付けられ、綱を付けてティベル川に沈められた。彼の体は深く沈み、長い時間が流れて誰もが彼が溺死したものと覚悟した。ところが皇帝の命を受けて人々が綱を引き上げると彼が元気な姿で水面に浮かび上がったのである。

続く火の試練においても、彼は燃え盛る炎の中に進み、しばらくそこに留まったが、かすかな火傷ひとつ負うことはなかった。人々にはにわかに彼が妖術使いではないかと疑い始める。エラクルは嫌疑を晴らすために、皇帝自身がこの宝石を帯びて火中に入ってみるように提案した。皇帝が石を受け取り、一瞬のためらいの後、思い切って炎の中に飛び込むと、彼の体を炎が包んだかに見えた。しかし、燃え盛る炎は彼の身に何の危害も加えることはなかったのである。

さらにエラクルは、この石の 3 つめの能力を証明するため皇帝配下の豪傑の挑戦に応じる。この宝石を身に着けただけで寸鉄も帯びない小さなエラクルが、武装した巨人のような騎士と対峙する様は、明らかに作者が旧約聖書のダヴィデとゴリアテの対決をイメージしていたことを窺わせる³⁷。彼は、常人ならば一撃で致命傷を負うような剣の打撃を繰り返し受けながら、かすり傷ひとつ負うことはなかった。かくして彼は、見事にその宝石が彼の語ったとおりの力を有していたことを証明したのである。

エラクルの能力を目の当たりにして皇帝は大いに心を動かされたが、まだ完全にそれを信じたわけではなかった。彼は、エラクルの持つ 3 つの才能のうち第 2 のそれ、すなわち、馬の真価を見抜く能力を試す計略を思いついた。彼は自分が所有するその価値 200 銀マルクとも言われた、大きさにおいても、美しさにおいても群を抜いた名馬を密かに定期市に出す手筈を整えた。最良の名馬を求めるよう命じられたエラクルがそれを選べば、本当に彼が馬を選ぶ眼識を備えていることが証明される、と皇帝は考えたのである。

市の中をエラクルは注意深く歩き回り、集まった数千頭の馬を検分した。皇帝の馬の前にも立ち止まったが、皇帝やセネシャルの期待に反して、それは彼の意を満たすものではなかった。代わりに彼が選び出したのは、見るからに貧相な仔馬だった。しかも、例によって彼は、2 マルク半という言い値に対して 40 マルクという思いもよらぬ高額のを無理やり売り手に受け取らせたのである。

皇帝は期待を裏切られて失望する。エラクルは、買い入れた仔馬を 1 年間、大事に育てれば、名馬 3 頭が交代で走っても敵わないほどの駿馬になる、と保証した。納得できない皇帝は今すぐそれを証明してみせるように要求した。やむなくエラクルは自ら仔馬の手綱を握り、皇帝、セネシャル、コネタブル（主馬頭）がそれぞれ所有するローマきっての 3 頭の名馬との勝負を受けて立つことになった。激しいレースの果てにエラクルの仔馬は勝利するが、エラクルが警

告したように、十分な体力をつける前に過酷なレースに臨んだため、力尽きて絶命してしまう。

この出来事を機にエラクルに寄せる皇帝の信頼の念は不動のものになった。彼は、エラクルが持つ第3の能力、すなわち女性の真の資質を見抜く能力、を駆使して将来の皇妃となるべき自分の花嫁として、非の打ち所のない美しい女性を選んでくれるよう後者に依頼した。例によって布告が発せられ、帝国中から生まれも高貴な見目麗しい令嬢たちが首都ローマに集められた。豪華な衣装に身を包み、互いに妍を競い合う令嬢たちが居並ぶ中を、エラクルは会釈を交わしながら歩き回り、ときどき立ち止まっては彼女たちと短く言葉を交わして彼女たちの容姿ばかりでなく内面の品性や心栄えを見極めようと努めた。最初に彼が目留めた際立って美しい令嬢は、自分が選ばれたと確信するや、権力を握った暁にすぐにエラクルを始末することを思い描き、それを逆に彼に見破られてしまう。夥しい数の美しい娘たちの中を歩きながら、エラクルの眼鏡に適う者はひとりも見出せなかった。ある者は軽佻浮薄、またある者は粗暴、別のある者は虚栄心が強く、また別の者はおしゃべり好き…。さらに別の娘は傲慢で、慎み深そうに見えたまた別の娘は追従者の言いなり、という始末。結局、彼は集まった令嬢の中から誰一人選ぶことなく集会の解散を告げなければならなかった。

疲れ果てて帰途に就いたエラクルは、ローマの下町で、擦り切れたチュニックをまとった貧しい娘と出会った。彼女は元老院身分の両親を失い、今は叔母の許で暮らす境遇であった。彼は一目で彼女こそ全ての美德を備えた理想の女性であることを見抜く。エラクルは彼女の叔母に、彼女が皇妃としての輝かしい未来があることを告げた後、直ちに皇帝の許に上って探し求めていた女性が見つかったことを報告した。喜んだ皇帝は3日後に婚礼を挙げることを決めた。エラクルは花嫁衣裳の用意や高貴な賓客たちの招待など、準備万端を取り仕切った。式の当日、聖ペテロ聖堂で皇帝と新皇妃の盛大な結婚式が執り行われ、ローマの町は華やかな祝祭に沸き立った。皇帝の絶大な信任を獲得したエラクルは、その後、その高貴な出自や神の加護を受けた数奇な来歴が知られるところとなり、皇帝自身によって騎士に叙任されて、宮廷において並ぶものなき権勢を誇ることになったのである。

(2) 皇妃アタナイスの恋愛譚

物語の第2部では、エラクルは後景に退き、主役の座は皇妃に委ねられることになる。

第2部の冒頭で我々は初めて皇帝がライス Laïs、新皇妃がアタナイス Athanaïs という名であることを知る。皇帝夫婦は結婚後7年³⁸にわたって仲睦まじく暮らしていた。皇妃は敬虔で寛大、貧者に多くの慈善を施し、正義を愛して弱者を守り、全ての臣民の敬愛を集めていた。

ところがあるとき、敵の攻撃を受けた国境地帯の都市を防衛するために、皇帝は急遽、出陣することが決まる。美しい妻をひとり都に残しておくことに強い不安を覚えた彼は、彼女を信じてその自由を奪わぬように、というエラクルの諫言を退けて、自分の不在中、皇妃を塔に監禁しておく、という決定を下す。彼女には監視役として12人の騎士とその奥方が付けられ、常に彼女の行動はこれら24人の監視の下に置かれることになった。彼女は特別な事情がない

限り、外出も外部の人間との接触も一切が禁じられたのである。

夫の不当な仕打ちに皇妃は悲嘆にくれ、夫を恨む気持ちが彼女の胸を満たした。そんなある日、彼女はおりからローマの町で開かれていた大規模な祭礼に臨席することになった。皇妃以下すべての身分の奥方令嬢がこの祭礼を観覧するのは古来からの慣行であり、皇妃の監視役たちもそれを拒むことはできなかったのである。

祭りの場では様々なアトラクションが見物客の目を捉え、若者たちは日頃鍛えた技を披露した。長太鼓、ハープ、リュート、バグパイプ、葦笛と演奏される楽器も多種多様だった。そうしたなか、アタナイスは元老院議員の息子パリデス Paridés が見事にハープを奏でる様子を目にして、たちまちこの美しい若者への恋情に襲われた。パリデスも思いは同じ。皇妃の姿を一目見た途端、彼は一瞬にして彼女に心を奪われたのである。

叶わぬ恋に憂いを深めたパリデスは心身を衰弱させて重病に陥った。彼を見舞った近所の老婆が、彼から事情を聞きだして恋の仲介役を引き受けることになる。彼女は毎年、聖ヨハネの日（6月24日）の前に1籠のサクランボを皇妃に届けるのを慣わしにしており、その用向きで皇妃を訪ねることになっていたのである。

翌日、易々と皇妃への面会を果たした老婆は、監視人の目を盗んでパリデスの思いを彼女に伝えた。皇妃も彼を愛していることを告白し、彼への手紙を隠したパイを老婆に託す。その手紙には2人の逢瀬を実現するためにパリデスが事前に整えておかねばならない準備の手筈が詳細に指示されていた。先の外出から8日目に当たる祭礼の最終日、皇妃は再度、行列を組んで町に出ることが予定されていた。パリデスはその日までに老婆の家の前の小さな池に水を満たし、夜半、人に知られぬように老婆の家の床下を掘って隠れ場所を作るように指示された。当日は朝からパリデスはその隠れ場所に身を潜め、老婆は竈に盛大に火を焚いて³⁹ 一行を待つことが取り決められた。

皇妃の一行が老婆の家の前を通りかかったとき、故意に気の荒い馬を選んで皇妃は馬から振り落とされたように装って池の中に身を投げ出した。護衛の者たちに助け出された彼女は、暖をとるために老婆の家に運び込まれる。お付きの者たちが代わりの衣装を取りに行っている間、家の中に皇妃は老婆と共に残され、アタナイスは、隠れ場所から現れた恋人と再会することができた。彼女の計略は完璧な成功を収めたかに見えたが、彼女は自分たちが犯した罪は神の目を免れられず、エラクルがきっと彼女の行状を察知して皇帝にそれを告げることを覚悟する。

事態は彼女が予知したとおりに進んだ。戦陣でいち早く彼女の変化を知ったエラクルは、皇帝にそれを知らせ、後者はすぐに遠征を中止してローマへの帰還を決めた。都に着くなり、妻の不貞をなじり、相手の男の名前を明かすように迫る皇帝に対し、アタナイスはパリデスの名を告白するが、罪は彼女一人が負うべきであり、真の愛に殉じて死ぬのは強く望むところと言いつつ放った。2人の激しいやりとりにエラクルが割って入り、皇帝に対して、そもそも今回の過ちの第1の原因は、罪もない皇妃を塔に監禁するという皇帝の誤った判断があり、もしも自分の忠告に従って、彼がそうした悪しき計画を放棄していたら今回の不幸も避けられたであろう

ことを指摘する。そして今は皇妃との婚姻の絆を解いて彼女に自由を返すように彼は勧告した。その発言に皇帝は抗弁することができず、彼はアタナイスとの離婚に応じ、恋人たちの結婚を許すこと、嫁資としてアタナイスの父親の資産を与えることを約束した。かくして物語の第 2 部は、カタストロフは回避したものの、当事者たちに苦い思いを残したまま幕を閉じることになる。

(3) 聖十字架頌揚の物語

物語の第 3 部では、エラクルが主役の座に復帰し、すでに西欧で広く知られていた皇帝エラクル（ヘラクレイオス）の功業が叙事詩的に物語られる。

作者ゴーティエは、主人公を東方の舞台に登場させるに先立って、コンスタンティヌス大帝の母ヘレナによる「真の十字架」発見とペルシア王コスドロエ Cosdroé⁴⁰ によるその奪取を物語る。ヘレナによる「真の十字架」発見に関しては、それがユダ Judas という名のユダヤ人の助力で実現し、後者はこれを機にキリスト教に改宗してキュリアス Cyriace という洗礼名を得て後に殉教者となったこと、ペルシア王コスドロエに関しては、彼は持ち帰った十字架を自分の玉座の上部に据え、あたかも自らを神のごとく人々に崇めさせたこと、が語られているのを後の議論との関連から記憶に留めておこう。

悪逆なペルシア王はコンスタンティノーブルの皇帝フーカルス Foucars⁴¹ を奸計を用いて暗殺させる。ペルシア王の暴虐に直面し、自らの指導者を奪われたコンスタンティノーブルの有力市民たちは、後継の皇帝候補として、ローマのエラクルとアフリカ在住のもう一人の人物を選び、彼らのうちで先に到着した者に帝位を与えようと言明した。この呼びかけに応え、真っ先に到着したのはエラクルであった。コンスタンティノーブルの市民は彼を玉座に昇らせ、ここに皇帝エラクルの治世が始まる。

コスドロエ王は、エラクルを討つべく、自らの息子が率いる大軍を差し向けた。その軍は、その後、さらに西に進んでノルマンディー、フランス、フランドル地方を征服することが見込まれていた (vv.5310-5312) ⁴²。キリスト教世界全体が存亡の危機に瀕していたのである。

天使に敵の大軍の来襲を告げられたエラクルは軍勢を召集し、全軍の先頭に立って出陣する。2 つの軍はドナウ川を挟んで向かい合った⁴³。軍議の場でエラクルは、数的に優勢な敵に会戦を挑むよりも、自分が敵の大將に一騎打ちを申し入れ、それによって 2 つの軍の命運を決すべきであると提案し、諸將の合意を得る。エラクルからの使者の申し入れにコスドロエの息子は応じ、両軍の見守るなか、両人は武装を整え、ドナウ川に架かる橋上に歩み出た。エラクルは屈強な軍馬にまたがり、かつてコンスタンティヌス大帝が携えていた名剣を帯びていた⁴⁴。

橋の中央で両人は激しくぶつかり合い、互いの意地と名誉と信仰を賭けた戦いが繰り広げられた。エラクルは神に祈りつつ戦い、最後に敵を切り伏せて勝利を制する。戦いの決着を受けて異教徒の軍勢 10 万が洗礼を受け、これを拒んで逃亡を図った 2 万の兵は新しいキリスト教徒の軍勢によって殲滅させられた。直ちにエラクルの軍勢はペルシアへ進軍を開始し、キリス

ト教への改宗を拒むコスドロエは処刑され、「真の十字架」は本来の持ち主の手に復したのである。

異教徒との戦いを制し、「真の十字架」を取り戻したエラクルの軍勢は意気揚々とイェルサレムに凱旋する。黄金 100 オンス⁴⁵ 以上の価値を持つ栗毛のスペイン馬にまたがったエラクルは絹の衣装に身を包み、白テンの毛皮で裏打ちしたマントを羽織って、右手に十字架を掲げていた (vv.6124-6139)。ところが、一行が、かつてキリストがイェルサレムに入城したときに用いたのと同じ「黄金門」から町に入ろうとしたとき、突然、異変が起きた。城壁の壁が左右から伸びて門を覆い、彼らの通行を阻んだのである。天使が現れ、エラクルの傲慢を責める。勝利の栄光は汝にそれを授けた神に帰するのであり、神の子が自らを貶めてロバに乗ってくぐった門をそのような華美な装いで通ろうとするのは傲慢も甚だしい、というのである。エラクルは深く恥じて豪華な衣装を脱ぎ捨て、それらを貧者に与え、自らは毛織の粗衣をまとして神の赦しを祈った。そのとき再び奇蹟が起きる。塞がった壁が左右に退き、門が旧に復したのである。歓喜の念を胸にエラクルはイェルサレムに入城を果たし、「真の十字架」を主の墳墓に再び据えたのであった。

作者ゴーティエは、この出来事が 9 月 14 日の十字架頌揚の祭日の起源を成したこと、コンスタンティノーブルに戻ったエラクルがその後、善政を敷き、死後、彼の墓の上に彼の騎馬像が建立されたこと、右手を異教徒の地の方角にまるで威嚇するかのように差し伸べたその像は、今もコンスタンティノーブルを訪れる者は目にすることができること、を語って物語を結んでいる⁴⁶。

IV 情報源の探求

以上、一見して分かるように、『エラクル』には種々雑多な説話や伝承的な要素が集積されており、それらが作者の手で巧みに組み立てられて皇帝エラクル（ヘラクレイオス）の架空の一代記の体裁を整えられているのである。以下では、主に博覧強記のフーリエの研究⁴⁷ に拠りつつ、作者ゴーティエがいかなる情報源からこれらの話題を取材したのか究明する作業に取り組みたい。

一連の情報の中では、物語の第 3 部に当たるエラクルの「真の十字架」奪回の説話の取材源を見出すのは比較的、容易なことだろう。聖十字架発見（5 月 3 日）と同頌揚（9 月 14 日）の祭日の来歴を説明する講話は、カソリック教会の典礼用朗唱集の中に収録されており、その種の作品は、9 世紀のラバヌス・マウルスを嚆矢とし、12 世紀のオータンのホノリウスの信仰手引書を経て、13 世紀のヤコブス・デ・ヴォラギネの『黄金伝説』に至るまで、連綿と西欧社会の中で書き継がれてきたからである。作者ゴーティエに残されていた作業は、ラテン語で書かれたそれらの講話を俗語に書き改めることだけであった。その際にゴーティエは、テオファネスの年代記を 9 世紀にラテン語に訳したアナスタシウス・ビブリオテカリウス⁴⁸ の歴史叙述を、

ヘラクレイオスの生涯を描くための補足情報を得るために参照したらしい。ただし、そこから得られた情報の一部を、ゴーティエは、自己の物語の筋書きに適合するように改変していることも看過してはならない。フリーエ⁴⁹と共に、改変箇所を確認しておけば、それは以下の3つのポイントである。①史実ではフォーカス帝はヘラクレイオスによって打倒されるのであるが、物語ではコスドロエ王の手で暗殺されることになっている点。作者が、主人公の手を先帝の血で汚すことを嫌ってこうした改変を施したことは間違いない。②ヘラクレイオスは史実では北アフリカのカルタゴから帝都を目指して出陣しているのに対して、物語では彼の出発地がローマになっていること。これは、後に述べる議論とも関連するが、実際にはコンスタンティノープルを舞台としていたテオドシウス2世と皇妃エウドキアを巡る説話をコンスタンティノープル以外の場所に移す必要に迫られ、ボスフォラスの畔の帝都を除けば、皇帝の宮廷所在地としては、ローマ以外に適当な場所が見出せなかったことが最大の理由であろう。これに加えて、作者ゴーティエの生きた12世紀当時、北アフリカはイスラム勢力の支配下にあったから、そうした異教徒の領国を彼の生誕の地とするのは作者にとって気乗りがしなかったことも一因かもしれない。いずれにしても、主人公の聖性を強調する上で、ローマ教会のお膝元の出自とした方が数段、彼の威光を増大させる効果を有したことは明白である。③コンスタンティノープル市民が皇帝の二重選挙を行い、先に帝都に到着した方に帝位を授けると決定している点。これは、フォーカス帝打倒の兵を北アフリカで挙げるにあたり、ヘラクレイオスは海路、その僚友のニケタスはエジプト経由の陸路でコンスタンティノープルを目指し、先に権力奪取に成功した方が皇帝位を得ることが兩人の間で約定された、という史実⁵⁰を改変したものであり、作者が行為の主体を帝都市民に改めている点が注目される。この点は、作者の選挙王制への共感を窺わせる箇所として注目される。この問題に関しては後にもう一度、議論されることになるだろう。

さて、物語の第3部に関して以上の点を確認した上で、以下では物語の前半部分に関して順を追って、やや詳細に検討を進めてゆくことにしたい。

(1) 主人公の誕生と神からの贈与

長年、子供のできなかった夫婦の願いを神が聞き届け、選ばれた子が生まれる、というモチーフは、新約聖書の洗礼者ヨハネの出生を思い出させる(ルカI,5-66)。けれども、『エラクル』に見られるような懐妊に至るための儀式ばった手続きは洗礼者ヨハネの出生譚には認められない。それゆえこの部分については、作者のゴーティエは別の情報源から着想を得たことになる。フリーエは、それをビザンツの典礼に由来すると考えている⁵¹。

ここでもう一度、主人公の懐妊の過程を確認しておこう(vv.115-218)。

カッシーヌは床に豪華な絨毯を敷き、その上に絹の掛け布を置いて横たわる。この布は、翌日、聖霊のミサ中の教会に奉納することが定められていた。次いで夫のミリアドスは最も美しいマントに身を包んで妻と結ばれ、彼女は選ばれし者を懐妊したのである。

フーリエは、以下のようなビザンツ教会の典礼上の慣行が、こうした一連の所作のヒントになったと想定している。まず、聖ソフィア聖堂で執り行われた典礼⁵²において、皇帝は至聖所に入ると、祭壇布で覆われた祭壇上で香を捧げ、そこに奉納物、特に絹の薄布を安置し、広げられたその布の上で聖祭が祝われる。この場合、絹の掛け布は、敷物（祭壇布）が神聖な空間に触れないようにするための遮断機能を果していると考えられる。他方、ローマ教会の奉納式に相当する儀礼の場では、司式者は、聖杯と聖体皿をゆったりとした薄布で覆うのが通例であった。このように見れば、絨毯を覆った絹の掛け布の上で、さらに大きなマントに包まれてなされたエラクルの懐妊は、ビザンツ教会の祭壇上で執り行われたキリストの身体的神秘的な再生の営みと平行関係にあることが分かる。こうした演出は、生まれる子供が神から遣わされ、将来、救世主たる運命を定められていたことを印象付ける意味をもったに違いない。

子供が生まれると神から手紙が届けられた。フーリエによれば、天上から手紙がもたらされるというモチーフは「中世の精神には身近な思想」であった⁵³。たとえば、第1回十字軍の際に隠者ピエールはこの種の手紙を人々に示したという。それゆえゴーティエ・ダラスがこの箇所を執筆するにあたっては、特定の典拠を求める必要はなかったと思われる。

では、その手紙の中で神がエラクルに授けることを約束した3つの才能（宝石、馬、女性の真価を見抜く能力）に関してはどうか。フーリエは、民間説話にこれと共通する構成の類話があること⁵⁴を指摘し、それらが東方から伝来した説話に由来すると考えている⁵⁵。そうした物語は、奴隷に身を落とした主人公が主人の持つ宝石、馬、それに主人の妻や婚約者、あるいは主人自身の本質、しばしばそれらに隠された欠陥、を見抜き、主人の信頼を得る、というのが基本的なパターンである。そこにおいて特別な才能を備えた主人公は、主人のもつ宝石の中に蛆虫がいること、彼の軍馬には生来の欠陥があること、彼の妻（婚約者）は低い家柄の出自であること、さらには主人自身が彼の母親と卑しい身分の男（パン屋、料理人、下僕など）との間に生まれた不義の子だったことを告げるのである。

そうした類話の中で、『エラクル』の物語と最も類似したものとしてフーリエが挙げているのがチュニス写本版『千一夜物語』（1731）の第891夜に収録された「王とその息子の話」である⁵⁶。以下、フーリエの要約に従って、その話の筋書きを再録しておこう⁵⁷。

ある国の王が非常に高齢に達してから一人の男子に恵まれた。美しさと聡明さにおいて彼を凌ぐ者はなかった。王子が青年期に達すると、老王は王位を息子に譲り、自分は俗世を捨てて隠者となり、神に身を捧げることを決意する。ところが父王の計画を耳にした息子は自分も父と行動を共にすることを強く主張する。かくして父子2人の隠者生活が始まった。

ところが、しばらくすると慣れぬ耐乏生活に2人の俄か隠者はすっかり困窮してしまった。飢えと疲労に耐えかねた父親は自分を奴隷として売るように息子に提案する。息子が、若い自分の方が買い手に事欠かないだろうから自分の方が奴隷になろう、と言い張ったのに対して、父は、もしもそうなれば、買い主は息子に重労働を課すだろうが、老人の自分ならばそうなるまい、と語って当初の言い分どおり、老人が市場で売られることになった。

予想されたように老人にはなかなか買い手が見つからなかったが、宝石と馬と人についての

知識があることを売り文句に、結局、ある君侯の料理人に 100 ドラクマで買い取られた⁵⁸。老人は奉公先の君侯の宮廷でその能力を発揮し、君侯の持つ 2 つの真珠のうち、どちらが良質か（一方の中には虫が入っていた）、2 頭の馬のうち、どちらが優れているか、を見抜き、さらには君侯自身が実はパン屋の息子であることをも見通した。人がそれをどこから知ることか尋ねると、老人の返答は「私はそれを星座と月のしるしの中に見るのです」というものだった。君侯はこの賢者の才知を称え、彼を贈物で満たしたという。

フリーエが指摘しているように、この説話は、①導入部において宗教的着想が示されていること（老王の俗世離脱、隠者となって神に身を捧げるという決意）、②息子が自分を奴隷として売るよう親に迫っていること、③奴隷は君主自身でなく、その家来の一人に購入されていること、④主人公の才能の開示は、少なくとも宝石と馬に関しては、欠陥の暴露ではなく、間接的にその質を示す、という形をとっていること、の諸点において『エラクル』と共通する特徴を示していた⁵⁹。作者ゴーティエが、直接、この説話から彼の物語の題材を得たと断定することはできないが、2 つの物語の明白な類縁性を勘案すれば、彼がこれに類する説話から着想を得ていたことは否定の余地はないだろう。

ただし、今回の説話では主人公が老人であることもあってか、『エラクル』のように主人公が自らの身命を賭けて自分の持つ能力を証明してみせる場面が欠けている。そうした場面については、別の情報源を想定する必要がある。

（2） 3 度の試練

『エラクル』において、主人公は、神から授けられた才能を証明するために、宝石、馬、女性の真価を見極めてみせるよう皇帝に命じられる。皇帝はそのために宝石と馬の大規模な市を開き、全国から美女を集めた。前 2 者に関しては、その当時から活況を示しつつあったシャンパーニュの大市の情景から作者は着想を得ていた、という説⁶⁰がある一方で、それらのいずれの場面にも、ビザンツの華やかな都市文明、爛熟した東方的情趣を作品にまとうせようとする作者の意向を読み取ろうとする見解も提示されている。たとえば、宝石市の場面は、コンスタンティノーブル都心のコンスタンティヌス広場において両替商が金貨や宝石を山積みになっている情景⁶¹が、そして競馬競走の場面は、有名な帝都のヒッポドロームにおける盛大なレースの様相⁶²が、容易に連想されるというのである。皇帝の花嫁を選ぶ一種の美人コンクールに関しては、ビザンツにおいて後述するテオドシウス 2 世の皇妃選り以来、10 世紀に至るまで断続的にその種のイベントがなされたことが知られている⁶³。集まった美女たちの中をエラクルが歩き回り、会話を交わしてゆく場面など、年代記から知られるテオフィロス帝（在位 829－842）の花嫁選り中のエピソード⁶⁴を彷彿とさせるものがあると言えるだろう⁶⁵。

そうした中で、主人公が、自分の見出した宝石の効験を立証するために自ら水、火、武器の試練に立ち向かう挿話は、異彩を放っており、単純にビザンツの風物や歴史的事象に結び付けることはできそうにない。ところが、これに関しても、モデルとすべき逸話が存在したことを

フリーエがつきとめている⁶⁶。それは、キリスト教迫害時代に殉教した聖コスマスと聖ダミアノスの説話であった。以下にこの話のあらましを記しておこう⁶⁷。

ディオクレティアヌス帝の治下、キリキア地方アイガイの町に暮らすコスマスとダミアノスの兄弟は敬虔なキリスト教徒であり、また優秀な医者として無償で医療を施し⁶⁸、多くの人々を癒していた。その噂を聞きつけた総督は、彼らを呼び出し、彼らがキリスト教の信者であり、皇帝への供儀を拒むのを見て、彼らを他の3人の兄弟と共に処刑することを決意する。最初に5人の兄弟は互いに鎖で縛られて海に沈められた。ところが天使が彼らを助けたので彼らは一人も溺れることなく無事であった。次に総督は彼らを燃え盛る炎の中に投じたが、彼らの誰一人として傷付いた者はいなかった。続いて総督は彼らを石打ちの刑に処すよう命じたが、石は途中で方向を転じて投げた者たちの方に降り注いだ。さらに彼らに矢を射掛けたところ、同じように矢は射手たちを散々に傷付けたのである。万策尽きた総督は、翌朝、これら5人の兄弟を斬首刑に処したという。

総督が繰り出す数々の攻め手をことごとく退けた聖者たちが、最後にあっけなく斬首されてしまうのは現代人の目にはいささか奇異に映るかもしれないが、そもそもこの逸話の主人公は殉教聖者なのだから、殉教しなければ話が完結しないわけで、話の結末としては他の選択肢はありえなかったのである。

ともあれ、この聖コスマスと聖ダミアノスの説話と『エラクル』の水、火、武器の難から持ち主を守る宝石の説話の筋立てが、著しく似通っているのは明白であろう。ただ、前者に登場する石打ちと矢の挿話が後者では省略され、前者の斬首の場面を連想させる剣による試練を後者の主人公が克服している、という点が小さな差異を成しているだけである。それでは、なぜ作者のゴーティエは、この殉教説話のモチーフを彼の物語の主人公をめぐる挿話に取り入れたのであろうか。こうした疑問は、次に語る皇妃アタナイスの説話との関連を語るなかで解き明かされることになる。

(3) 皇妃アタナイスの説話

皇帝ライスと皇妃アタナイス、それに元老院議員の息子パリデスの三角関係の物語が、6世紀後半の年代記作家ヨハネス・マララスの伝えるビザンツ皇帝テオドシウス2世（在位 408－450）と皇妃エウドキア、そして皇帝の親友パウリヌスをめぐるそれ⁶⁹を原型にしていたことは衆目の一致しているところである。そのことは何よりも、『エラクル』の皇妃の名アタナイスが、皇妃エウドキアの結婚前の名前と同じであることから裏付けられるであろう。以下にマララスの記述に従って、この挿話の概容を示しておこう。

皇帝テオドシウス2世は青年期に達するに及んで結婚を望み、彼の姉で摂政を務めていたブルケリアは四方に使者を送って美しく高貴な娘たちを探し求めさせた。たまたま同じ頃、アテネの哲学者レオンティオスの娘アタナイスが、兄弟たちによって父の遺産相続から排除されたことに憤慨し、訴訟を起こすために都の叔母を頼ってコンスタンティノーブルに上がっていた。

彼女は摂政プルケリアに面談を求め、後者に自己の言い分を申し立てる機会を得た。アタナイスの美貌と見事な話し振りにプルケリアは魅了され、彼女が弟の花嫁に相応しい女性であることを確信する。両人の2度目の面談の際には、テオドシウスも親友のパウリヌスと共にカーテンの背後で身近に彼女の容貌に接した。若き皇帝はすっかり彼女を気に入り、妃に迎えることを決めた。アタナイスは結婚を機にキリスト教に改宗し（彼女はそれまで異教徒だったのである）、エウドキアと名を改めた。その後、彼女は敬虔で学識豊かな皇妃として名を馳せることになった。

ある年のクリスマス、皇帝は元老院の一行を引き連れて帝都内の教会に参詣した。このとき、病気のパウリヌスは同行を免除されていた。通りで一人の貧者が進み出て、フリュギア産の巨大な林檎を皇帝に献上した。この珍しい贈物に皇帝は喜び、多くの謝礼を貧者に与えた上で、林檎を直ちに皇妃の許に届けさせた。それを受け取った皇妃は、これを病のパウリヌスへ見舞いの品として送り、その品の由来を知らぬパウリヌスは、それを皇帝の許に届けさせ、かくして巨大な林檎は一巡して皇帝の許に戻ることになる。皇妃とパウリヌスの仲に疑念を抱いた皇帝がエウドキアに林檎の所在を尋ねると、彼女はすでに食べてしまったと白を切ったが、皇帝が当の林檎を出して見せるに及んで嘘をついたことを認めざるを得なかった。皇帝はエウドキアに対して離別を宣言する。パウリヌスには死罪に処すことが宣告された。エウドキアはエルサレムに隠遁し、そこで没することになるが、最後までパウリヌスとの関係については潔白であると言い続けていたという。

以上が、マララスの伝えるテオドシウス2世と皇妃エウドキア、それに廷臣パウリヌスの物語である。皇帝宮廷に縁故を持たぬ身寄りもない娘がその美貌と才知で皇帝の後見人の信頼を獲得し、皇帝の花嫁に迎えられる、という前半のストーリーが両者に共通しているの是一目瞭然であろう。ところが、後半部の大きな林檎をめぐる物語は、『エラクル』の中では姿を消し、その代わりに皇妃とパリデスの姦通事件がそれに取って代わることになる。なぜ物語はこのような変化を遂げるようになったのだろうか。この問題を考えるにあたっては、両者を繋ぐ位置を占めた中間的な形態の説話の存在を考慮に入れることが必要になる。ここで問題となるのは、コンスタンティノーブルの様々な名所旧跡の来歴を集めて10世紀頃に成立したとされる『パトリア』と総称された説話集の中に、ある教会の建立譚として収められている物語である⁷⁰。

皇帝テオドシウス2世の治下、彼の友人パウリヌスは金角湾の奥、ブラケルナエ地区の近くにひとつの教会を建設していた。あるとき、聖ソフィアに参詣中の皇帝は大きなフリュギア産の林檎を献上され、それを皇妃の許に送り届けさせた。たまたま皇妃の許を訪ねていたパウリヌスは林檎を見て賛嘆の声をあげる。以前から彼に好意を抱いていた皇妃はその林檎を彼に贈物として手渡した。例によって事情を知らぬパウリヌスはそれを皇帝に献上する。2人の仲を疑った皇帝は妃を呼び出し、林檎の所在を尋ねた。皇妃はそれをパウリヌスに与えたことをあっさりと認め、皇帝は不機嫌な面持ちで彼女を追い返した。

気持ちのおさまらない皇帝は、パウリヌスが宮殿に出頭した折に密かに彼を襲わせ暗殺する計画を練る。宮殿の暗がりではパウリヌスは刺客の襲撃を受けるが、耳を切られただけで辛うじ

て危難を脱した。彼が命拾いをしたのは、彼が教会を建立して奉献しようとしていた聖人が、彼にその仕事を仕上げる時間を与えることを望んだためであるという。計画の失敗を知った皇帝は何食わぬ顔で友に接していたが、その後、考えを改め、彼に教会を完成させるのに十分な時間的猶予を与えた後に公衆の面前で彼を斬首させた。失意の皇妃は聖地に隠遁することになった。パウリヌスが精魂を尽くして建立したこの教会堂こそが、コンスタンティノーブルの城壁の北に位置する聖コスマスと聖ダミアノスに捧げられた教会だったのであり、それは、彼の名にちなんでパウリナという異名を帯びたという⁷¹。

ここにおいて我々は、聖コスマスと聖ダミアノスの説話とテオドシウス2世夫妻の姦通疑惑事件の接点に到達することになる。聖コスマスと聖ダミアノスの聖堂（しばしば、これを縮めて「コスミディオ」の名で知られていた）は、11世紀中葉に皇帝ミカエル4世（在位1034-1041）によって大規模な増改築が施されていた⁷²から、12世紀当時にもその威容を留めていたと思われる。第1回十字軍の際、ゴドフロア・ド・ブイヨンの軍勢は、当時、修道院になっていたこの教会の近くに設営したと伝えられている⁷³ので、その存在は十字軍に参加した諸侯を通じて西欧世界にも知られていたに違いない。想像をたくましくすれば、ゴーティエ・ダラスが十字軍帰りのフランスの騎士から、途中に立ち寄ったコンスタンティノーブルの土産話として、殉教者兄弟の説話とパウリヌスと皇帝夫妻をめぐる逸話の双方を、同時に耳にしている様子を思い描くこともできるだろう。

『パトリア』版の説話は、マララスが伝えるそれと比べて、以下の3点にわたって大きく変容を遂げていることが分かる。すなわち、①エウドキアがパウリヌスに愛を感じていたことが明示されていること、②パウリヌスがエウドキアの許を訪ね、2人の間に直接、会話が交わされていること、③彼女は林檎をパウリヌスに与えたことを率直に皇帝に伝えていること、である。とりわけ、マララスでは冤罪として強く示唆されているパウリヌスと皇妃との姦通を、皇妃が胸の中でそれを望んでいたかのようにここでは描かれていることに注目したい。これは、フリーエが指摘しているように、民衆の想像力が元の話に絶えず作用を及ぼした結果と考えられる⁷⁴。まさしく、そうした人々の思考の延長線上に、皇妃と若い恋人との密通が実現する『エラクル』の筋書きが成立したと考えることができるのである。

ここで改めて、『エラクル』において、テオドシウス2世夫妻をめぐる原話から大きく改変されている箇所を確認しておこう。

まず第一に、物語の設定となる時間と空間が大きく変えられていた。物語の舞台はコンスタンティノーブルではなくローマであり、皇帝夫妻はエラクル（ヘラクレイオス）の同時代人だから7世紀に生きたことになる。さすがに作者のゴーティエも、テオドシウス2世とヘラクレイオスが同時代人でないことは承知していたのだろう。舞台をティベルの畔の都に移すと同時に、皇帝の名をライス、皇妃の恋人の名をパリデスと改め、原話の痕跡を隠すのに腐心している。皇帝の名の由来について、フリーエは、「韻を踏むために求められたものであり、おそらく『テーベ物語 Roman de Thèbes』⁷⁵に登場するライウス Laius から着想を得たのだろう」と語る⁷⁶。これに対してパリデスの名は、ラテン語のパリス Paris の属格形パリディス Paridis

に由来する、というのがフリーエの見立てである⁷⁷。なぜパリスかと言えば、言うまでもなく災厄をもたらす林檎の連想から、有名な「パリスの審判」の故事が想起されているからである。復讐の女神が投じたヘスペルデスの黄金の林檎をめぐる3女神の争いに裁定を下すことを託されたトロイアの王子パリスは、絶世の美女を授けるというヴェヌス（アフロディテ）の申し入れを受けて彼女を勝者と認め、黄金の林檎を彼女に与えた⁷⁸。その結果、ヴェヌスの助力で彼はスパルタの王妃ヘレネを連れ去り、それがトロイアの滅亡をもたらす大戦争の発端となったのは広く知られている通りである。女神たちの争いの審判役を委ねられたとき、パリスがフリュギアで羊飼いをしていたことにフリーエは注目する。教会に参詣途上のテオドシウス2世に捧げられた巨大な林檎はフリュギア産だったことを想起しなければならない⁷⁹。また、これはこれまで誰も指摘してこなかったことだが、トロイアのヘレネが名前の類似性からコンスタンティヌス大帝の母ヘレナへの連想を誘い、イェルサレムにおける「真の十字架」発見で名を残す後者から、聖地に長く滞在し、同地の多くの教会や史跡に名を刻んでいたもう一人のビザンツ皇妃エウドキア⁸⁰へと連想の輪が繋がっていった、と空想することもできるかもしれない。

さて、『パトリア』では胸に秘めた思いに留まった皇妃の恋心は、『エラクル』では現実の密通事件に発展する。これは重大な飛躍であり、そのために作者は大きく物語の枠組みを改変しなければならなかった。まず、密通が実現するためには、皇帝が都にいるのは不都合だったから、彼は長期の遠征に出かけることになり、都から追い払われた。次に作者は、季節をクリスマスから聖ヨハネの祭日（6月24日）の頃へと移動させた。恋人の出会いの場となる公的な祝祭は、冬よりも夏の方が相応しかったからである。それに伴って、本来の説話では中心的な役割を果たした林檎は季節外れの果物として姿を消す。このことは作者にとって、原話の痕跡を消すのに好都合だったことだろう。林檎に代わって、この季節に相応しいサクランボが小道具に登場した⁸¹。

パリスとの逢瀬を実現するためにアタナイスが考案した術策は、作者のオリジナルではなく、一般に「汚辱の洗水盤 *le bénitier d'ordure*」と呼ばれる、中世の笑話文学に頻出する主題であることをフリーエが指摘している⁸²。そこにおいて、貴婦人はわざと泥水の中に飛び込み、衣服を乾かすとか、着替えを取りに行かせるという名目で部屋の中に閉じこもり、そこに前から隠れていた恋人との密会を楽しむのである。『エラクル』の現代仏語訳の序文でC.ピエールヴィルが指摘しているように、道徳的墮落を象徴する泥水の中に皇妃が転落しているのは、彼女の徳性の失墜を意味するものと理解しなければなるまい⁸³。

結局、事件が露見した後、皇帝はエラクルの助言を容れて、皇妃と離別した上で彼女がパウリヌスと結婚することを許す。愛し合う者同士が厳しい試練の果てに正式に結ばれる、という結末は、一見したところではハッピーエンドのように見えるが、この幕切れを包む空気は重苦しい。皇帝ライスは最愛の妃を失った。N. J. レーシーが指摘するように、そこにエラクルの天賦の才を信じることができず、そのために段階的に次第に重い懲罰を課される皇帝の姿を認めることもできるだろう⁸⁴。一方、理想の皇妃として登場したアタナイスは、今では姦通を犯した当事者として、昔日の輝かしさを2度と取り戻せぬ立場に身を落としてしまった。あるい

はまた、こうも言えるだろう。アタナイスたちが激昂した皇帝の手で悲劇的な最期を遂げたならば、彼らは愛に殉じた恋人たちとして崇高な理念を体現し、人々の心に彼らの記憶を刻ませることができたかもしれない。だが、作者はそれを許さなかった。前述のピエルヴィルは、アタナイスとパリデスを結婚させることで作者のゴーティエは「彼らがトリスタンとイゾーやランスロとグィネーヴルのような神秘的なヒーローになるのを妨げ、彼らを社会的秩序の中に再統合させた」のであると語る⁸⁵。ここに作者の宮廷風恋愛に対する否定的な態度を読み取ることは容易であろう。ありふれた結婚生活に入った彼らは以後、世俗の暮らしに身を沈め、2度と物語の中で語られることはない。

このように見てゆけば、『エラクル』の第2部で本来の主人公が長く後景に退き、アタナイスとパリデスの姦通譚が長々と語られていることも得心が行く。ここでもピエルヴィルが語っているように、アタナイスとパリデスは主人公の地上的な似姿なのである⁸⁶。アタナイスがエラクルと驚くほど似た境遇にあったことは注目に値する。エラクル同様に彼女も元老院身分の父を失い、孤児として貧しい暮らしを送っていた。エラクルと出会ったとき、彼女はのみすぼらしい身なりのために「10歳にしか見えなかった」(v.2582-2583)という。これは、エラクルがセネシャルに買われて宮廷に入ったのが10歳のときだったことと明らかに符合している。

他方、パリデスの父親も元老院議員である。テオドシウス2世の説話では、皇帝の花嫁選びに一役買った彼の親友が皇妃の不倫の相手になっているから、そうした役回りをそのまま引き継げばアタナイスの相手役はエラクルが務めることになるはずだった。しかし、天命を実現するために生れ落ちた彼が「地上の愛」に熱中することはもとより不可能である。ピエルヴィルは、パリデスがエラクルの宮廷風の分身であることを示す仕掛けを作者が凝らしていることを指摘している。たとえば、通常はエラクルにのみ付される「いとも賢明な *plus sage*」という形容辞がパリデスにも適用されていること(v.3465)、そして彼がアタナイスに会いに行ったときにまとっていた「金糸で刺繍された絹の衣装」(v.3482)が、イェルサレムに入城するときのエラクルの衣装(v.6136)に類似していたこと、がそれである。これら華美な装いは「傲慢の印」であり、エラクルが神の定めた道を歩むためには放棄しなければならない地上の富を象徴していた⁸⁷。かくして、「地上の愛」に殉じたアタナイスとパリデスが退場した後に、彼らの対極に立って「天上の愛」に身を捧げるエラクルの栄光の物語が始まるのである。

V 文学と歴史の接点

最後に、この作品の中に認められる幾つかの重要なポイントに関して、筆者の気付いた範囲で、同時代の歴史的状況の中に位置付ける作業に取り組んでおきたい。

(1) 東方の敵

言うまでもなく、皇帝エラクルの敵は、コスドロエに率いられた東方の異教徒の帝国である。

ところが、コスドロエ王が「真の十字架」を掲げた不可思議な神殿（あるいは宮殿）の記述が、12世紀半ばに成立した『シャルルマーニュ巡礼記』に登場するコンスタンティノーブルの皇帝宮殿の描写に影響を及ぼしているという近年の研究⁸⁸を勘案すれば、コスドロエに仮託された異教の帝王の姿の背後にビザンツ皇帝の影を感じ取ることも可能かもしれない。

このような見方は、ゴーティエ・ダラスのもうひとつの作品『イルとガルロン』と併読することで補強されるだろう。そこには、ローマ皇女ガノルに結婚を迫り、それが拒まれると大軍を差し向けてイタリアに侵攻する「ギリシアの皇帝」が登場しているのである(v.5399-5416)。西欧に大軍を送り、人々を恐怖の念で満たす点において、『イルとガルロン』の「ギリシアの皇帝」が、『エラクル』におけるコスドロエと同じ役回りを演じていることが分かるはずである。

ゴーティエが語るところによれば、ガノルが「ギリシアの皇帝」を嫌っていたのは、彼の最初の妻である彼女の従姉妹が彼によって虐待死を遂げていたからであるという(v.5399-5406)。一般に、この「ギリシアの皇帝」のモデルとしては、12世紀中葉のビザンツ皇帝マヌエル1世コムネノス（在位1143-1180）が想定されている⁸⁹。その根拠は、彼の最初の妻がドイツ皇帝の親族であり、彼女と死別していたこと⁹⁰、そしてイタリアの支配権を求めて積極的な軍事・外交攻勢を仕掛けたこと⁹¹、が知られているからである。そのように見れば、作者のビザンツ的東方に向けられた視線は、ビザンツと比較的良好な関係を保っていたシャンパーニュ宮廷よりも、イタリア支配をめぐるビザンツと厳しく対立していたフリードリヒ・バルバロッサ治下のドイツ皇帝宮廷の雰囲気を反映しているようにも感じられる。

（2）選挙王制への共感

『エラクル』と『イルとガルロン』のいずれの作品においても、主人公は己の才覚と能力によって栄達を重ね、最後には人々の懇請を受けて皇帝の座に登っている。その際、これまたいずれの作品においても、主人公の宮廷入りの道を開き、彼の最大の理解者となっているのが、皇帝のセネシャルであることは注目に値する点であろう。というのも、ゴーティエ・ダラスのライヴァルであるクレチアン・ド・トロワが描くアーサー王のセネシャル、クーに典型的に見出される⁹²ように、セネシャルは文学作品の中で、しばしば無礼で口さがなく、嫌味な人物として描き出される傾向があったからである。ところがゴーティエの『イルとガルロン』では、主人公は、戦死したセネシャルの後任の座に収まるだけでなく、前述したごとく、最後には皇帝の娘と結婚して、帝権すら掌握するに至っているのである。これは、一般に、作者ゴーティエが彼のパトロンであるブロワ伯ティボーにオマージュを捧げている部分と理解されている。というのも、ブロワ伯はフランス王ルイ7世のセネシャルを務め、王の娘婿でもあったからである。ゴーティエはセネシャルを極力、魅力的な人物として描き出すことで、パトロンの歓心を得ることに努めていたに違いない⁹³。ただし、ゴーティエがこの作品を通じて、王の娘婿であるブロワ伯に、王座の後継者となる、という魅力的な夢を吹き込んだ、などと考えるのは行き過ぎだろう。当時の王位継承の規定によれば、カペー家の男系親族に属さぬ人物がフラン

ス王位に就く可能性はほぼ完全に閉ざされていたからである。

だが、フランス王だけが王ではない。『エラクル』にせよ、『イルとガルロン』にせよ、主人公は生国を離れて異国の君主の座に収まっているのだから、そのように見れば、作者が彼のパトロンに提示したイメージは急にリアリティーを帯びてくるようにも感じられる。ブロワ伯ティボーにしても、彼の身近な人物や同輩たちが異国で王位に就いた事例を充分に見聞していたのは明らかである。たとえば、彼の父方の叔父エティエンヌ（スティーヴン・オヴ・ブロワ）は12世紀の前半にイングランド王の地位に就いているし⁹⁴、1131年にはアンジュー伯フルクがイェルサレム王の座に登っている⁹⁵。また、1171年頃にはブロワ伯自身の弟エティエンヌが将来のイェルサレム王就任含みで同王の娘との縁談の交渉を行っていた⁹⁶。

一方、これらの作品を、今度はブロワ伯がフランス国内で占めた有力諸侯という視角から眺めてみると、また少し異なる色調を帯びることになる。

先にも語ったように、これらの物語の主人公は世襲原理に基づくことなく、人々の懇請を受けて皇帝の座に登っている。その場合、「人々」の主体を成すのは、実際にはその国の諸侯、有力貴族層なのである。『エラクル』において主人公を皇帝に選出したのはコンスタンティノーブルの名望家たち *li preudome* (v.5226) であった。ただし、これは皇帝不在中の出来事であるから、非常時の例外的現象と言うこともできるだろう。ところが、『イルとガルロン』では、諸侯の集団的意志は君主のそれに優先される、という思想がいつそう露骨に表明されている。高齢の皇帝に代わって戦場で指揮を執っていたセネシャルが戦死したとき、諸侯は皇帝の意向を確認することなくイルにその後釜に座るよう要請し、「ドイツ皇帝は、この諸侯会議があなたに約束したことを拒否できるような立場には決してないのです」と断言しているのである (vv.2472-2474)。さらに、老皇帝が没し、危機的状況が昂進する中で諸侯たちは皇帝権をイルに差し出し、自分たちの主君になるよう要請した (vv.6080-6082) ⁹⁷。

このような形で君主の座に登った主人公は、当然のことながら独裁君主として振舞うことはできなかった。彼はその地位を諸侯たちの総意に負っており、彼らの意思を最大限、尊重する姿勢を示すことになる。そうした態度は、エラクルが軍議の席上において、「諸卿よ。余はこの作戦中、汝らに諮ることなく決定を下すことを望んではおらぬ。それは、余がいかなる責めにもさらされぬ為であり、いかなる賛辞も、いかなる栄光も、汝らと分かち合わぬことがないようにするためである」 (vv.5440-5444) と発言していることに如実に示されている。

このように、単純な血統原理からではなく、個人の優れた能力と徳性に基づいて君主が選出され、君主と諸侯たちは互いに敬意を払って協調して統治にあたる、というゴーティエの作品に描き出された国家像は、フランスよりも同時代のドイツの宮廷像に接近しているように思われる。それは、彼のパトロンの一人であるドイツ皇妃ベアトリクスに意に沿うものであることは間違いあるまい⁹⁸。あるいは、さらに想像をたくましくすれば、この時期のカペー王権は、周囲をイル・ド・フランス出身の中小貴族出自の近侍者集団で固め、次第に大諸侯を宮廷から遠ざける傾向を強めたと言われている⁹⁹ が、ゴーティエの描く世界は、そうした現実に対するブロワ・シャンパーニュ家に代表されるフランス大諸侯の不満と苛立ちを投影している、と解

積することも可能であろう。とりわけ、フィリップ・オーギュストの即位直後、王は母の実家のブロワ・シャンパーニュ家の影響力排除の動きを示し、両者の間に一時、緊張関係が生じたこと¹⁰⁰を勘案すれば、ゴーティエが語る理想の君主像から読み取れる政治的メッセージはさらに明確になるように思われる。これらの文学作品はパトロンの意を迎えることが暗黙の前提条件となっている以上、後者の価値観が結果として、それらの中に浸透していたことは容易に推察されるのである。

(3) プロヴァンという場^{トボス}

『エラクル』という作品を執筆するにあたって、作者のゴーティエが、シャンパーニュ伯領内でトロワと並ぶ重要な宮廷都市プロヴァンの様々な名所旧跡から多大なインスピレーションを受けていたことは、これまでも何人もの研究者が指摘してきた通りである¹⁰¹。たとえば、『エラクル』の第3部で「真の十字架」発見に手を貸した元ユダヤ人聖者キュリアコス¹⁰²は、伯宮殿の側に聳える聖堂にその名を留めている。この聖堂は、12世紀半ばにシャンパーニュ伯アンリ1世「寛大伯」によって再建され、伯から多額の寄進を受けていたことが知られている¹⁰²。また、今日も町の中心部でその威容を示しているセザールの塔は、クーパーの論文によればすでに1137年にはその存在が確認されるという¹⁰³が、しばしば監獄として利用されたこの塔から、物語の中でアタナイスが幽閉された塔を連想するのは容易であろう。これに加えて、プロヴァンの掘削が容易な石灰岩質の土質も、作者が恋人たちの逢瀬の場を考案するのに貢献したようだ。中世には家の地下が掘られて、すでに多くの貯蔵施設が存在したという¹⁰⁴。ピエルヴィルが語るところによれば、パリデスがわずか1週間で地下の隠れ家を掘り出すことができたのも、その柔らかな土質に負うところが大きかった、というのである¹⁰⁵。

シャンパーニュ伯の領内で1年を通じて継続的に開催された有名な大市も、『エラクル』の中に明確な刻印を残している。一連の大市のうち、プロヴァンでは、9月のサン・タユール、11月の聖マルタン、そして5月の大市、と年に3度のそれを開催していたのだが、これらのうち、9月のサン・タユールの市は十字架頌揚の祭日（9月14日）に開幕し、5月の大市は聖キリアス（＝キュリアコス）の祭日（5月1日）と聖十字架発見のそれ（5月3日）に対応していた。聖十字架崇敬の信仰はプロヴァンの町にしっかりと定着していたのである。そして『エラクル』の第3部は、これらの祭日の正当性を改めて確認するものと言えるだろう。

また、12世紀後半に「真の十字架」を称揚することは、十字軍精神を宣揚すると共に、ブロワ伯ティボーの兄シャンパーニュ伯アンリ1世の遺徳を偲ぶ行為にもなりえた。というのも、アンリ伯は第2回十字軍に参加した後、1179年、2度目の聖地遠征に旅立ち、2年後、虜囚生活を経て苦勞の果てに帰国した折に「真の十字架」の聖遺物を故郷にもたらしたからである。伯がこの貴重な聖遺物を安置した宮殿付属の礼拝堂は、これを機に「聖十字架」礼拝堂と名を改められた。帰国時において、すでに心身の消耗の著しかった彼がまもなく世を去ったことは先に記した通りである。ピエルヴィルは語る。「主人公による「真の十字架」奪回を物語り、そ

の任務が達成された後の彼の死を称揚することは、間接的にアンリの勲功を称えることにもなった。こうした視角において『エラクル』はアンリの弟であるティボー、アンリの妻マリー、その盟友であるボードゥワン5世—この作品の被献呈者—の求めで執筆されたアンリ「寛大」伯への賛辞文として読むこともできるのである¹⁰⁶。

『エラクル』の末尾において詩人は、コンスタンティノープルに立つひとつの彫像について詳述している (vv.6479-6514)。それは、作者が説明するところによれば、エラクルの死を悼む市民たちによって都心に立てられた彼のモニュメントであった¹⁰⁷。像は東を向いて右手をその方向に伸ばし、あたかもペルシア人に対してローマ人の領土に近づかぬよう威嚇しているかのように見えたという。コンスタンティノープルの都に立つこの皇帝騎馬像は、シャンパーニュ伯アンリを偲ぶ人々の心象世界の中では、聖地から「真の十字架」を持ち帰り、十字軍遠征に生命の炎を燃やし尽くして世を去った伯の姿と重なり合ったのである。

VI 繰り返される歴史—結びに代えて—

すでに語るべき言葉も尽きた。以下は若干の蛇足である。

1187年7月4日、ティベリアスの西方、ハッティーンの丘陵地帯において聖地のキリスト教徒部隊とサラディンの率いるムスリムの軍勢が衝突、戦いはキリスト教徒軍の無残な敗北で終わった。キリスト教徒の陣営は、イェルサレム王ギー・ド・リュニジャン以下、聖地の主だった王侯貴族の大半が捕虜となったことに加え、士気を鼓舞すべく、台車に載せられ、聖職者たちに守られて戦場に運ばれていた「真の十字架」の聖遺物も敵の手に奪われるという衝撃的な災禍に見舞われたのである。サラディンは防衛者を失ったキリスト教徒支配下の都市や城塞を次々と攻略し、王都イェルサレムに対しては9月21日に攻囲が始まり、6日後には聖都は彼の軍門に下った¹⁰⁸。

この事件が、西欧の人々に、往古のホスロー王による「真の十字架」奪取と聖地劫掠の物語を思い出させたことは想像に難くない¹⁰⁹。今こそ「新たなエラクル」が立つべきときであった。西欧の王侯はこぞって十字軍の旗の下に結集する。世に言う第3回十字軍である。聖十字架に厚い崇敬の念を寄せるブロワ・シャンパーニュ家の諸侯たちは、遠征の準備に手間取る英仏両王を尻目に、いちはやく軍を整え出陣した。一門の新たな惣領であるシャンパーニュ伯アンリ2世（寛大伯の嫡男）を筆頭に、その叔父であるブロワ伯ティボー5世とサンセール伯エティエンヌがこれらの軍勢の先頭に立っていた。彼らの軍勢は1190年7月末にアッコに到着する¹¹⁰。

聖地に旅立ったブロワ・シャンパーニュ家の諸侯たちを見送った人々は、もはや2度と彼らの姿を目に映すことはなかった。すでに1190年10月の時点で、サンセール伯エティエンヌは彼の甥のバール伯らと共に物故者としてカンタベリー大司教付き従軍司祭の書簡の中で報じられている¹¹¹。ブロワ伯ティボーも聖地に着いて3月も経たぬ間にこの世を去った¹¹²。最後に残

されたシャンパーニュ伯アンリ 2 世は、フランス王フィリップ・オーギュストが帰国した後、フランス諸侯軍をまとめつつ、叔父にあたるイングランド王リチャード 1 世と連携し、聖地のキリスト教国家再建に全力を尽くした。1192 年 4 月、彼はイェルサレム王位継承者のイザベルと結婚して王国統治の最高責任を引き受け、その後も情勢を安定化させるためにその手腕を揮ったが、1197 年 9 月 10 日、アッコンの城の塔から謎の墜落死を遂げて唐突にその人生を閉じてしまう。第 3 回十字軍に参加したブロワ・シャンパーニュ家の 3 人の諸侯は、いずれも志し半ばにして異郷の地に果てた。

ムスリム軍に奪われた「真の十字架」に関しては、和平協議の場で再三、その返還が議論されたが、結局、キリスト教徒側に戻されることはなかったようである¹¹³。「新たなエラクル」の歴史は未完に終わった。しかし、ブロワ・シャンパーニュ家一門の聖地に寄せる思いは、さらに次の世代へと受け継がれてゆく¹¹⁴。「エラクル」の物語は、何世代にもわたって、一門の伝統の中で生き続けるのである。

註

¹ カルタゴ総督を務めていたアルメニア系軍人で同名のヘラクレイオスの息子。610 年、北アフリカから艦隊を率いてコンスタンティノープルに攻め上り、皇帝フォーカスを打倒して即位。彼が即位した当時、帝国は、バルカンのアヴァール人と、ビザンツ領シリア・エジプトを席卷したササン朝ペルシアによって東西から挟撃され、未曾有の危機に直面していた。626 年には帝都自体が、連携したアヴァール人とペルシア軍に攻囲される事態に至った。こうした状況の下で、ヘラクレイオスは自ら軍勢を率いてペルシア領の心臓部を衝くという起死回生の作戦を敢行し、それは見事に成功して一連の軍事行動はビザンツの勝利で幕を閉じた。しかし、彼の晩年に勃興したアラブ・イスラム勢力に対しては有効な施策を打ち出すことができず、苦心して奪回した東方領土はその後、永遠にビザンツから失われてしまう。軍略家として彼は非凡な能力を発揮したのは事実だが、帝国内の宗教論争を収拾させることができず、姪と結婚してスキャンダルを引き起こし、晩年は後継者問題で国内政治の混迷を招くなど、政治手腕に関しては疑問符がつく、というのが最近の識者の評価である。cf W.E.Kaegi, A.Kazhdan and A. Cutler, "Herakleios", in A. Kazhdan ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, New York · Oxford, 1991, p.916f. 最新の同帝の評伝的研究として、W. E. Kaegi, *Heraklius, Emperor of Byzantium*, Cambridge, 2003、彼の治世を対象とした論文集として、G. J. Reinink & B. H. Stolte eds., *The Reign of Heraclius (610-641). Crisis and Confrontation*, Leuven, 2002、を挙げておく。井上浩一『ビザンツ皇妃列伝－憧れの都に咲いた花－』筑摩書房、1996 年、73-104 頁（ヘラクレイオスの姪にして妃のマルティナの評伝）も併せて参照のこと。

² G.Ostrogorsky, *Geschichte des byzantinischen Staats*, 3Aufl., München, 1963, S.77-91 (邦訳：ゲオルグ・オストロゴルスキー (和田廣訳)『ビザンツ帝国史』、恒文社、2001 年、131 - 146 頁) ただし、ヘラクレイオスをテマ制の創設者と考えるオストロゴルスキーの学説は、今日では広範な批判の対象になっている。テマ制成立をめぐる近年の研究動向に関しては、中谷功治「テマからテマ制へ——テマ制の成立時期をめぐる——」『待兼山論叢』21 号、1987 年、29-50 頁を参照のこと。

³ 「真の十字架」奪回とイェルサレムへのその奉還はヘラクレイオス治世の最も輝かしいエピソードとして、多様なイメージで彩られることになった。それは十字架のシンボリズムと結び付いて初代キリスト教皇帝コンスタンティヌス大帝の勝利を喚起させ、ヘラクレイオス＝「新しいコンスタンティヌス」として新たなキリスト教帝国の到来を宣揚すると共に、聖櫃をイェルサレムに奉還したダヴィデ王の故事(『旧約聖書』「サムイル記下」6 章)とのアナロジーからヘラクレイオスをダヴィデのイメージと重ね合わせる見方も流布した。さらに同帝のイェルサレム入城は「枝の主日」におけるキリストのその記憶とも結

び付き、十字架によって死を制したキリストと、それによって夷狄を征服したヘラクレイオスの姿が重ね合わされることにもなったのである。cf. J. W. Drijvers, “Heraclius and the *Restitutio Crucis*: Notes on Symbolism and Ideology”, in G. J. Reinink & B. H. Stolte eds., *The Reign of Heraclius (610-641)*, pp. 175-190. なお、この出来事を同時代の政治的文脈の中に位置づける試みとして、A. Frolow, “La vraie Croix et les expédition d’Héraclius en Perse”, *Revue des Études Byzantines*, 11, 1953, pp. 88-105 がある。

⁴ 邦語では、ヤコブス・デ・ウォラギネ（前田敬作・西井武訳）『黄金伝説』第3巻、人文書院、1986年、406-409頁。ヘラクレイオスの事績の西欧における受容については、L. Kretzenbacher, *Kreuzholzlegenden zwischen Byzanz und dem Abendlande. Byzantinisch-griechische Kreuzholzlegenden vor und um Basileios Herakleios und ihr Fortleben im lateinischen Westen bis zum Zweiten Vaticanum*, München, 1995, S. 67-77 を参照。

⁵ *Willelmi Tyrensis Archiepiscopi Chronicon*, éd., R. B. C. Huygens, 2 vols, Turnhout, vol. 1, 1986, p. 105f; William of Tyre, *A History of Deeds Done Beyond the Sea*, tr. by E. A. Babcock & A. C. Krey, New York, 1943 (rep. 1976), p. 60f.

⁶ cf. P. W. Edbury ed., *The Conquest of Jerusalem and the Third Crusade*, Aldershot, 1996, p. 3f.

⁷ 最近の著作として、G. Regan, *First Crusader. Byzantium's Holy Wars*, New York, 2003, esp. pp. 37-134 を挙げておく。フランスの史家ルネ・グルッセも彼の十字軍史の冒頭に「十字軍以前の東方問題」という1章を設け、ヘラクレイオスの功業を「これは既に一つの十字軍であった」と評価している。ルネ・グルッセ（橋口倫介訳）『十字軍』、白水社、1954年（原著の初版発行は1944年）。

⁸ “quod tempore quo Eraclius Augustus Romanum administrabat imperium, …”, *Willelmi Tyrensis Archiepiscopi Chronicon*, éd., R. B. C. Huygens, vol. 1, p. 105.

⁹ 本稿で利用した校訂版は、Gautier d’Arras, *Eracle*, publié par G. Raynaud de Lage, Paris, 1976 である。他に、Gautier d’Arras, *Eracle*, Traduit en français moderne d’après l’édition de G. Raynaud de Lage par A. Eskénazi. Introduction et dossier par C. Pierreville, Paris, 2002 を適宜、参照した。

¹⁰ Gautier d’Arras, *Ille et Galeron*, publié par Y. Lefèvre, Paris, 1988, p. 223, v. 6592. なお、『イルとガロン』に関しては、以下の仏訳、英訳も併せて参照した。Gautier d’Arras, *Ille et Galeron*, Traduit en français moderne par J.-C. Delcols et M. Quereil, Paris, 1993; Gautier d’Arras, *Ille et Galeron*, Edited & translated by P. Eley, London, 1996.

¹¹ フランドル伯フィリップ・ダルザスの文書 111 通に登場するこの人物は、後述するクーパーの研究によれば、伯の宮廷で立身し、フランドルのセネシャル（家令）の娘を娶り、*prévot*（司法官）あるいは、*minister et officialis Philippi* といった称号を帯びて文書に姿を見せていた。彼は、伯の不在時には伯領の経営を委ねられたほどの有力者であり、他方、アラスの聖ヴァース修道院からだけでも 17 の所領を授封された大領主でもあった。

¹² F. A. G. Cowper, “More Data on Gautier d’Arras”, *PMLA*, 44, 1949, pp. 302-316. W. C. Calin, “On the Chronology of Gautier d’Arras”, *Modern Language Quarterly*, 20, 1959, pp. 181-196, esp. p. 187f もこれに同調している。

¹³ A. Fourrier, *Le courant réaliste dans le roman courtois en France au Moyen Âge*, t. I, Paris, 1960, pp. 180-183. cf. Gautier d’Arras, *Eracle*, Traduit par A. Eskénazi. Introduction et dossier par C. Pierreville, p. 8f; Gautier d’Arras, *Ille et Galeron*, Edited & translated by P. Eley, pp. vii-viii.

¹⁴ 『エラクル』の校訂者レイノー・ド・ラグは、ゴーティエが宗教的テキストに精通し、詩篇の言葉を自然なフランス語に改めていることに注目して、彼を、定期的な聖務を執り行っている聖職者と見なし、さらに、詩人が唯一、エノー伯ボードゥワンのみを 2 度にわたって「我が主君」（*mon signor*）と呼んでいることを根拠に、彼が伯の宮廷礼拝堂付司祭だったと推定している。Gautier d’Arras, *Eracle*, publié par G. Raynaud de Lage, p. ix. しかし、この学説に対して、A. フーリエは、ゴーティエの活動の中心をブロワ・シャンパーニュ宮廷であると想定し、彼は「かなり貧窮した聖職者だったに違いなく、修道院から修道院、定期市から定期市、城から城へと遍歴する *vagants* の一人と見なすほどではないにせよ、彼が『エラクル』の序文の中で某大物の吝嗇ぶりとブロワ伯ティボーの気前よさを対比させる類の場面を素描していることを思えば、彼はトゥルヴェールやジョングルーの狭い世界に極めて近い存在だと感じられる」と論じている。A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 181

¹⁵ たとえば、主人公イルの父親の名エリデュックは、マリーの短詩の登場人物に由来していた。マリー・

ド・フランス（月村辰雄訳）『十二の恋の物語』、岩波文庫、1988年、XII「エリデュック」、221-269頁参照。

¹⁶ Bibliothèque Nationale, fonds français, 1444 (通称A写本。13世紀末。同一写本内に23のテキストを収め、『エラクル』は14番目 (f. 124a-154a)。写字生はしばしば軽率なミス。ピカルディー方言の影響); Bibliothèque Nationale, fonds français, 24430 (通称B写本、または Tournai 写本。13世紀末。トゥールネンに關係する多くのテキストを収録。A本より原本から遠ざかっているが、誤字は少ない); Bibl.Naz, L.I, 13 (通称トリノ写本、トリノ国立図書館所蔵。1904年の火災時に水を被り、判読が困難) 以上の知見は、Gautier d'Arras, *Eracle*, publié par G. Raynaud de Lage, p.v-viii による。

¹⁷ Ms. Arsenal 3518. f 96b. (筆者未見) A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 181 による。

¹⁸ cf. W. Frey Hersg, *Der Eracius des Otte*, Esen, 1990.

¹⁹ ゴーティエに対する中世人の評価については C. Pierreville, *Gautier d'Arras: L'autre Chrétien*, Paris, 2001, p. 16f を参照。

²⁰ A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 188f.

²¹ この2人の家系と人物像については、*ibid.* pp. 181-183 参照。

²² cf. *ibid.* pp. 198-204.

²³ *ibid.* p. 198f.

²⁴ 新しい作品とは、言うまでもなく『イルとガルロン』のことである。物語の後半でブルターニュ出身の騎士イルがギリシア皇帝の攻撃に苦しむローマを救い、ローマ皇女ガノルと結ばれるという筋立てをもつこの作品は、12世紀後半における主にイタリアを舞台としたビザンツ皇帝マヌエル1世とドイツ皇帝フリードリヒ・バルバロッサの対立を下敷きに見なす見解が有力である。cf. C. Pierreville, *Gautier d'Arras: L'autre Chrétien*, p. 13. フーリエは、この作品の中で教皇とローマ・ドイツ皇帝が友情で結ばれていることに注目し、それを、この作品が1177年のヴェネツィアの和約以降に成立したことの証拠と見なしている。A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 198. また、ローマ皇女ガノルの姿に、皇妃ベアトリクスが投影されているであろうことについては、C. Pierreville, "D'Athanaïs à Ganor, les métamorphoses de l'impératrice dans les romans de Gautier d'Arras", dans *Reines et princesses au Moyen Âge. Ve colloque internationale organisé par le CRISMA, les 24-27 novembre 1999 à Montpellier*, Montpellier, 2003, pp. 659-669, p. 666 を参照。

²⁵ A. Fourrier, *Le courant réaliste*, pp. 199-202.

²⁶ C. Pierreville, *Gautier d'Arras: L'autre Chrétien*, p. 14f. この件に関しては後にもう一度、触れることになる。

²⁷ 今回の一門会議は、新王フィリップ2世が母の実家のシャンパーニュ家の影響力から脱する姿勢を示し、フランドル伯フィリップ・ダルザスを重用し、伯の姪イザベル・デノーと結婚したことに対して、シャンパーニュ派が対抗策を協議するために開催したものと思われる。これに対してフランドル伯とエノー伯は自ら会議の場に乗り込み、二重結婚の約定を再確認することで関係修復と両陣営の和解を図ったのである。cf. J. Bradbury, *Philip Augustus. King of France 1180-1223*, London, 1998, pp. 40-43, 46-48.

²⁸ A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 203.

²⁹ *ibid.* p. 203 f.

³⁰ *ibid.* p. 204. C. Pierreville, *Gautier d'Arras: L'autre Chrétien*, pp. 13-15. も作品の年代画定に関してほぼ同意見である。

³¹ 『エラクル』の物語の概略は、Gautier d'Arras, *Eracle*, publié par G. Raynaud de Lage, pp. xii-xvii; Gautier d'Arras, *Eracle*, Traduit par A. Eskénazi. Introduction et dossier par C. Pierreville, pp. 12-24 から得られる。

³² 最近のキングの論文は、主人公が神から与えられた宝石、馬、女性の真の価値を見極める能力がデュメジルの論じるインド・ヨーロッパ語族特有の3機能論に符合している、というヴォルフツェッテルの議論（後述、註32参照）を受けて、『エラクル』の3部構成自体がこの3機能論に対応するものであると主張している。すなわち、彼の所論によれば、主人公の誕生と神による特殊な能力の付与が語られる第1部は聖者伝の体裁をとっているので「聖性」を象徴し、皇妃と若い恋人との不倫愛が主題となる宮廷風恋愛仕立ての第2部は「豊饒性」、そして主人公による異教徒に対する「十字軍」遠征と「真の十字架」奪回が主要なテーマとなる武勲詩風の第3部は言うまでもなく「武勇」を体現していた、というのである。cf. D. S. King, "The Voice from Within: Intra-textual *Auctoritas* in Gautier d'Arras's *Eracle*", *Neu-*

philologische Mitteilungen, 104, 2003, pp. 237-248, p.246.

- ³³ その名は、1165年に生まれたフィリップ・オーギュストの幼名としても知られている。作者には、物語の主人公と、シャンパーニュ家出身の母から生まれた王家の後継者の姿を重ね、後者の輝かしい未来を称えようとする気持があったのかもしれない。また、この作品の第2部でビザンツ皇帝テオドシウス2世がモデルとなる説話が採用されていることを思えば、ディウドネという名がラテン語のテオドシウスをフランス語に訳した形であることにも、何やら作者の意図的な暗示めいたものを感じずにはいられない。
- ³⁴ 先にも述べたように、ヴォルフツェッテルは、エラクルが神から授けられた3つの権能は、G. デュメジルの論じるインド・ヨーロッパ語族特有の3機能論に符合していると論じている。すなわち、①「中世における宝石のシンボリズムを考えれば、宝石は徳性上の美德のシンボルであると同時に教会の信仰と君主権力のアトリビュートでもあった」から「聖性」を示し、②女性の真価を識別する能力は「身体とセクシャリティーに関する第3の機能を示している」ので「豊饒性」を、そして③「馬は騎士の象徴的なアトリビュートである」からそれは、「容易に第2の機能、貴族の戦闘的機能と関連付けられる」ので「武勇」を示していた、と考えられるのである。そして、ヴォルフツェッテルによれば、「こうした3つの才能を有することは、こうした視点から見れば、3つの機能を自由にする、換言すれば、社会の全体的な知恵を獲得すること」を意味していた。F.Wolfzettel, "La recherche de l'universal. Pour une nouvelle lecture des romans de Gautier d'Arras", *Cahiers de Civilisation Médiévale, Xe-XIIIe siècles*, 33, 1990, pp.113-131, p.123f.
- ³⁵ すなわち、ビザンツ金貨1千枚である。ビザンツ金貨は72分の1リトラ（ローマ・ポンド）と規定されており、1リトラは319～324グラム程度と言われているので、仮に1リトラ=320グラムとすれば、1000ベザントは黄金4400グラム強に相当する。
- ³⁶ 中世西欧の貨幣価値を厳密に算定するのは困難である。仮にフィリップ・オーギュスト時代のパリ・ドゥニエ銀貨の重量は1.2237グラム、そのうち銀の含有量は0.5009グラムという数字を適用すれば、6ドゥニエは銀約3グラムに相当する。一方、1マルクを約245グラムと想定すると、40マルクは銀9800グラムとなる。それゆえ、エラクルは商人の言い値の3200倍もの代価を支払ったことになる。
- ³⁷ cf. Gautier d'Arras, *Eracle*, Traduit en français moderne par A.Eskénazi, p.16. この箇所から、ヘラクレイオス帝にダヴィデのイメージを重ねる傾向があったことを作者のゴージェエが十分に知悉していたことが分かる。cf. J. W. Drijvers, "Heraclius and the *Restitutio Crucis* : Notes on Symbolism and Ideology", p. 184f.
- ³⁸ ヴォルフツェッテルによれば、7という完全数は完璧な状態と符合しており、また、この幸福が非歴史的な性格を持つことを表していた。cf. F.Wolfzettel, "La découverte de la Femme dans les romans de Gautier d'Arras", *Bien dire et bien apprendre*, 8, 1990, pp.35-54, p.41. なぜ7が完全数かと言えば、「4と3という対立しかつ補い合う特性をそれ自身の中に結合しており、それ自身完結し閉じられた環という完璧さを表すのに用いられる」からである。ジャック・リバー（原野昇訳）『中世の象徴と文学』青山社、2000年、34～38頁を参照。引用箇所は35頁。
- ³⁹ 炎暑の夏のローマにおいて屋内で盛大に火を焚くのはリアリティーに欠ける、として従来、この設定は槍玉に挙げられてきた。しかし、フリーエの考察に従えば、作者ゴージェエにイタリア旅行の経験はなかったようであり（A.Fourrier, *Le courant réaliste*, p.201）、こうした細かな瑕疵に目くじらを立てるのはさして意味のあることではないだろう。あくまでも作者がイメージしていたのは、彼の故郷の北フランスの夏なのである。
- ⁴⁰ その歴史上のモデルは、ササン朝ペルシアの王ホスロー2世（在位590～628）である。彼は、ビザンツ皇帝マウリキオス（在位582～602）の軍事援助でペルシア王位を確保したため、当初はビザンツの同盟者の地位にあったが、マウリキオスの失脚に乗り、ビザンツ領に侵攻、エジプト・シリアを占拠、イエルサレムから「真の十字架」を奪い、配下の軍勢はバルカンのアヴァール人と連携して帝都コンスタンティノープルに迫った。cf. W. E. Kaegi, "Chosroes II", in A. Kazhdan ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, p.432.
- ⁴¹ モデルはビザンツ皇帝フォーカス（在位602～610）。彼は反乱軍の首領としてマウリキオス帝を打倒し、権力を掌握したが、その後、北アフリカから進軍してきたヘラクレイオスの軍勢によって今度は彼自身が帝位を追われることになった。
- ⁴² ノルマンディーとフランスが併記されているところから見て、ここでの「フランス」が、カペー王家の本拠が置かれていた、いわゆるイル・ド・フランスの意味で用いられていたことが分かる。要するに、こ

こで作者の念頭にあるのは、彼の生活圏である北フランス一帯であり、おそらく彼にとってそこが西欧世界の中心部を意味していたのであろう。

- 43 F.Wolfzettel, "La recherche de l'universal. Pour une nouvelle lecture des romans de Gautier d'Arras", p.120 は、ドナウ川を挟んでビザンツ軍と異教徒の軍勢が対峙する、という状況は、物語の同時代のペチエネグ人の侵攻を想起させるものだと言っている。あるいは、別の見方として、ササン朝ペルシアと同時期にバルカンにおいて帝国に深刻な脅威を及ぼしていたアヴァール人の勢力を、同じ異教徒の軍勢として作者がペルシア軍と混同していた、と解釈する余地もありそうである。
- 44 ヘラクレイオスを、最初のキリスト教皇帝コンスタンティヌスの偉業を再現する「新しいコンスタンティヌス」として描き出そうとする指向性の名残をここに感じ取ることができそうである。cf. J. W. Drijvers, "Heraclius and the *Restitutio Crucis*: Notes on Symbolism and Ideology", pp. 181-184.
- 45 バリの旧リーブリの 16 分の 1 と考えて、1 オンス=30.59g。それゆえ 100 オンスで黄金約 3.06kg になる。
- 46 テクストではこの後に、作者によるシャンパーニュ伯妃マリーとエノー伯ボードゥワンへの謝辞、エノー伯へこの物語を献呈する旨を記したエピローグが付されている (vv.6515-6570)。
- 47 cf. A. Fourrier, *Le courant réaliste*, pp. 210-257.
- 48 9 世紀ローマ教皇座における最大のビザンツ通の高位聖職者。ローマにおいて「スラヴ人の使徒」キュリロスとメトディオスを庇護し、870 年のコンスタンティノーブル公会議に西方教会を代表して参加した。また、神学書を中心に多くのギリシア語文献をラテン語に訳出していることでも知られている。cf. M. McCormick, "Anastasius Bibliothecarius", in A. Kazhdan ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, p.88f.
- 49 A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 240f.
- 50 Theophanes, *Chronographia*, ed., C. de Boors, 2vols, Leipzig, 1883-1885 (rep. Hildesheim, 1963), vol. I, p.297; C. Mango and R. Scott ed., *The Chronicle of Theophanes Confessor. Byzantine and Near Eastern History AD 284-813*, Oxford, 1997, p.426.
- 51 A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 240f.
- 52 聖ソフィアで皇帝が行った儀式の概容は、G. Dagron, *Emperor and Priest. The Imperial Office in Byzantium*, Cambridge, 2003, pp.84-95 を参照。
- 53 A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 234.
- 54 たとえば、13 世紀末にイタリアで成立した説話集『ノヴェリーノ』第 3 話 (*The Novellino or One Hundred Ancient Tales. An Edition and Translation based on the 1525 Gualteruzzi editio princeps*, Edited and translated by J. P. Consoli, New York & London, 1997, pp.18-21. 舞台は「ギリシアのフィリップ王(フィリポス 2 世?)の宮廷」とされている)やビザンツ末期の寓話文学『プトコレオン』(cf. H.-G. Beck, *Geschichte der Byzantinischen Volksliteratur*, München, 1971, S.148-150) に同種の物語が収められている。
- 55 *ibid.* pp.216-219.
- 56 邦訳の 3 種の『千一夜物語』、すなわち、筑摩世界文学全集版 (バートン版、佐藤正彰訳、1964-1970 年)、岩波文庫版 (マルドリユス版、豊島与志雄他訳、1988 年)、平凡社東洋文庫版 (カルカッタ版、前嶋信次・池田修訳、1966-1999 年) のいずれの該当箇所にも、この説話は収録されていない。
- 57 A. Fourrier, *Le courant réaliste*, p.217f.
- 58 フーリエは、ここでドラクマという貨幣単位が用いられていることを、この説話がギリシア起源であることの証拠と見なしている。 *ibid.* p.218, n.157.
- 59 *ibid.* p.218.
- 60 cf. F.A.G. Cowper, "Gautier d'Arras and Provins", *Romanic Review*, 22, 1937, pp.291-300, esp. p.295f.
- 61 cf. Robert de Clari, *La conquête de Constantinople*, éd., P. Lauer, Paris, 1924, p.89; Robert of Clari, *The Conquest of Constantinople*, tr. by E.H. McNeal, New York, 1936 (rep. Toronto, 1996), p.110.
- 62 12 世紀当時のヒッポドロームにおける競馬や祭典については、さしあたり、拙著『ビザンツ 幻影の世界帝国』 講談社、1999 年、115-128 頁を参照。また、これに先行する馬市の場面は、ビザンツ史の視点から見れば、有名なテサロニケの聖デメトリオスの定期市の情景を想起させる。cf. Pseudo-Luciano, *Timarione*, ed., R. Romano, Napoli, 1974, pp.53-55; *Timarion*, tr. by B. Baldwin, Detroit, 1984, p.44f.
- 63 cf. W. Treadgold, "The Bride-Shows of the Byzantine Emperors", *Byzantion*, 49, 1979, pp.395-413;

- Id., "The Historicity of Imperial Bride-Show", *Jahrbuch der österreichischen Byzantinistik*, 54, 2004, pp.39-52; 井上浩一「ビザンツ専制国家体制の確立と皇妃コンクール」、水林彪・金子修一・渡辺節夫編『王権のコスモロジー』、弘文堂、1998年、308-338頁
- ⁶⁴ 井上浩一氏の前掲論文（註 63）315-316 頁に、テオフィロスとこの集會に参加した娘の一人カッシアとの対話が再録されている。
- ⁶⁵ これ以外にも、皇妃アタナイスが参観する祭礼の様子は、騎士道ロマンスによくあるような馬上槍試合ではなく、一連のスポーツ、音楽、舞踊の実演会であり、完全にビザンツの伝統に合致するものであったことをフーリエは指摘している。cf. A.Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 242.
- ⁶⁶ *ibid.*p. 245.
- ⁶⁷ 邦語では、ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』第 3 巻、478-484 頁においてこの説話を読むことができる。
- ⁶⁸ そのために彼らは、アナルギュロイ（アルギュロス「銀」「貨幣」に否定の接頭辞 a が付いた形の複数形、「代価なしで（診療する人）」の意）という異名で呼ばれたという。
- ⁶⁹ Ioannes Malalas, *Chronographia*, ed. H. Thurn, Berlin, 2000, pp. 272-278; *The Chronicle of John Malalas*, translated by E.Jeffreys, M.Jeffereys and R.Scott, Melbourne, 1986, pp.191-195. この逸話の概容は、井上浩一『ビザンツ皇妃列伝—憧れの都に咲いた花—』、17-20 頁から得られる。
- ⁷⁰ Th. Preger ed., *Scriptores originum Constantinopolitanarum*, Leipzig, 1901-1907 (rep.1975), II, pp. 261-263; A.Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 244.
- ⁷¹ C. マンゴによれば、この教会の創建者はテオドシウス 2 世の親友のパウリヌスではなく、5 世紀後半の篡奪者レオンティオスの母親パウリナに帰すべきであるという。しかし、ここでは、現実には誰がそれを創建したかは問題ではない。『パトリア』に語られているごとく、後代の人々はこの教会を篡奪者の母ではなくテオドシウス 2 世の友、パウリヌスの記憶と結び付けて語り継いできたことこそが銘記されるべき事実なのである。cf. C. Mango, "On the Cult of Saints Cosmas and Damian at Constantinople", in *Θυρία στην μνήμη της Λαοκαρίνας Μπούρα*, Athens, 1994, pp.189-193; cf. E.McGeer, J.Nesbitt & N. Oikonomides, *Catalogue of Byzantine Seals at Dumbarton Oaks and in the Fogg Museum of Art*, vol.5, Washington, D.C., 2005, p. 82.
- ⁷² Michael Psellos, *Chronographie*, éd., E. Renauld, 2 vols, Paris, 1928 (1967), p.83f; R.Janin, *La géographie ecclésiastique de l'empire byzantin. I: Le siège de Constantinople et le patriarcat œcuménique, 3: Les églises et les monastères*, 2 éd., Paris, 1969, pp.286-289.
- ⁷³ Anne Comnène, *Alexiade*, éd., B.Leib et P.Gautier, 4vols, Paris, 1937-1976, vol.2, p.220.
- ⁷⁴ A.Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 245.
- ⁷⁵ スタティウス『テバイス』の翻案作品。1150 年頃成立。12 世紀中葉に登場する一連の古代模倣の物語のひとつ。ベディエ・アザール共編（辰野隆・鈴木信太郎監修、杉捷夫他訳）『中世文学 I』（フランス文学史 第 1 巻）、創元社、1942 年、99-100 頁を参照。
- ⁷⁶ A.Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 227.
- ⁷⁷ *ibid.*p. 223f.
- ⁷⁸ この故事がビザンツでもよく知られていたことは、前述したテオフィロス帝のお妃選びのコンテストの際に、皇帝が黄金の林檎を持ち、それを意中の女性に手渡すことで選考の結果を明らかにした、という挿話からも確認できる。前掲の井上浩一「ビザンツ専制国家体制の確立と皇妃コンクール」315-316 頁を参照。
- ⁷⁹ A.Fourrier, *Le courant réaliste*, p. 223.
- ⁸⁰ *ibid.*p. 237. に聖地におけるエウドキア所縁の史跡が列挙されている。同地で彼女は「新しいヘレナ」と呼ばれていたという。
- ⁸¹ サ克蘭ボは林檎よりは小粒だが、それと同様に赤く球状の果物として中世の伝承では性的な象徴性を帯びたという。cf. F.Petrinas, *Sailing to Byzantium: The Byzantine Exotic in Medieval French Literature*, Ph.D.thesis, The City University of New York, 2004, p.174. なお、ビザンツ民衆文学における林檎のシンボリズムに関しては、A.R.Littlewood, "The Erotic Symbolism of the Apple in Late Byzantine and Meta-Byzantine Demotic Literature", *Byzantine and Modern Greek Studies*, 17, 1993, pp.83-103 を参照。
- ⁸² A.Fourrier, *Le courant réaliste*, pp. 229-232.

- ⁸³ Gautier d'Arras, *Eracle*, Traduit en français moderne par A.Eskénazi. Introduction et dossier par C.Pierreville, p.19
- ⁸⁴ すなわち、皇帝は①宝石に関しては、エラクルを信じなかったことで目立った実害は被らなかったが、②馬の場面では、それによってエラクルの選んだ仔馬を殺してしまい、そして最後に③女性に関して、最愛の妻を失うという最大の罰を受けるのである。 N.J.Lacy, "The Form of Gautier d'Arras, *Eracle*," *Modern Philology*, 83, 1986, pp.227-232.
- ⁸⁵ Gautier d'Arras, *Eracle*, Traduit en français moderne par A.Eskénazi. Introduction et dossier par C.Pierreville, p. 32.
- ⁸⁶ 以下の記述は、C. Pierreville, "Le couple et le double dans les romans de Gautier d'Arras", dans M.-M.Castellini éd., *Arras au Moyen Âge. Histoire et littérature*, Arras, 1994, pp.97-109 による。
- ⁸⁷ C. Pierreville, "De l'apparence à l'essence: la description dans le roman d'*Eracle* de Gautier d'Arras", *Bien dire et bien apprendre*, 11, 1993, pp.317-330.
- ⁸⁸ L.Polak, "Charlemagne and the Marvels of Constantinople", in P.Noble, L.Polak and C.Isoz ed., *The Medieval Alexander Legend and Romance Epic. Essays in Honor of David J.A.Ross*, Millwood, N.Y., 1982, pp.159-171, esp. p.165f.
- ⁸⁹ C. Pierreville, "L'image du roi et de l'empereur dans les romans de Gautier d'Arras", *Bien dire et bien apprendre*, 18, 2000, pp.125-137, p.127; Id., "D'Athanaïs à Ganor, les métamorphoses de l'impératrice dans les romans de Gautier d'Arras", dans *Reines et princesses au Moyen Âge. Ve colloque internationale organisé par le CRISMA, les 24-27 novembre 1999 à Montpellier*, Montpellier, 2003, pp.659-669, p.666.
- ⁹⁰ マヌエル 1 世の最初の妻ベルタ・フォン・ズルツバッハは、ドイツ皇帝コンラート 3 世の義理の姉妹（コンラートの妻の姉妹）であり、コンラートの養女の資格でビザンツに輿入れした。ちなみに彼女は 1160 年頃に没している。cf. C.M.Brand, "Bertha of Sulzbach", in A.Kazhdan ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, p.284.
- ⁹¹ cf. P.Magdalino, *The Empire of Manuel I Komnenos, 1143-1180*, Cambridge, 1993, pp.83-95; 渡辺金一「十二世紀の西ヨーロッパとビザンツ」、『岩波講座世界歴史』第 10 巻、岩波書店、1970 年、130-149 頁。
- ⁹² たとえば、菊池淑子『クレティアン・ド・トロワ『獅子の騎士』—フランスのアーサー王物語—』平凡社、1994 年、15-27 頁、60-63 頁等を参照。
- ⁹³ Gautier d'Arras, *Eracle*, Traduit en français moderne par A.Eskénazi. Introduction et dossier par C.Pierreville, p.25; M.-M.Castellini, "La cour et le pouvoir dans les romans de Gautier d'Arras", *Bien dire et bien apprendre*, 8, 1990, pp.18-34, p.20, n.7.
- ⁹⁴ 城戸毅「イングランド封建国家」、青山吉信編『世界歴史体系 イギリス史 1—先史～中世—』、山川出版社、1991 年、205-250 頁、特に 225-229 頁。
- ⁹⁵ *Willelmi Tyrensis Archiepiscopi Chronicon*, éd., R.B.C.Huygens, vol. 2, pp.631-634; William of Tyre, *A History of Deeds Done Beyond the Sea*, tr. by E.A.Babcock & A.C.Krey, vol. 2, pp.47-51.
- ⁹⁶ この計画は基本的に合意され、エティエンヌ自身が聖地入りしたにもかかわらず結局、破談に終わった。*Willelmi Tyrensis Archiepiscopi Chronicon*, éd., R.B.C.Huygens, vol. 2, p.947; William of Tyre, *A History of Deeds Done Beyond the Sea*, tr. by E.A.Babcock & A.C.Krey, vol. 2, p.384.
- ⁹⁷ cf. M.-M.Castellani, "La cour et le pouvoir dans les romans de Gautier d'Arras", pp.26-28.
- ⁹⁸ 彼女の夫フリードリヒ・バルバロッサは、前王コンラート 3 世の甥にあたる。コンラートは自分の息子が幼少であったため、甥のフリードリヒを後継者に指名し、後者は 1152 年のフランクフルト選挙集会において諸侯の「満場一致」の支持を得て、ドイツ王に選出された。バルバロッサの国王選出をめぐる政治情勢については、山本伸二「フリードリヒ 1 世・バルバロッサの国王選出（1152 年）」、『西洋史学』163 号、1991 年、1-17 頁に詳しい。
- ⁹⁹ 渡辺節夫「カペー王権と中央統治機構の発展」、渡辺節夫編『ヨーロッパ中世の権力編成と展開』、東京大学出版会、2003 年、147-183 頁、特に 164-174 頁。
- ¹⁰⁰ 本稿 註 25 を参照。この時期のフランス国内の政治情勢と主要な政治党派については、併せて J. W. Baldwin, *The Government of Philip Augustus: Foundations of French Royal Power in the Middle Ages*, Berkley - Los Angeles, 1986, pp.6-17 も参照のこと。

- ¹⁰¹ A.Fourrier, *Le courant réaliste*, pp. 253-256 ; Gautier d'Arras, *Eracle*, Traduit en français moderne par A.Eskénazi. Introduction et dossier par C.Pierreville, pp.26-28 ; F.A.G.Cowper, "Gautier d'Arras and Provins", *Romanic Review*, 22, 1937, pp.291-300.
- ¹⁰² cf. *Saint-Quiriace de Provins*, Lyon, 2003, p.2f.
- ¹⁰³ F.A.G.Cowper, "Gautier d'Arras and Provins", p.294.
- ¹⁰⁴ 今日では、中世の施療院 (l'hôtel-Dieu) の遺構地下の迷路状の構造物がプロヴァン観光の呼び物のひとつになっており、ガイド・ツアーが行われている。
- ¹⁰⁵ Gautier d'Arras, *Eracle*, Traduit en français moderne par A.Eskénazi. Introduction et dossier par C.Pierreville, p.27.
- ¹⁰⁶ *ibid.* p. 28.
- ¹⁰⁷ コンスタンティノーブルの都心、聖ソフィア聖堂と皇帝宮殿の間に位置するアウグステイオン広場の円柱上に据えられていたブロンズ製の皇帝騎馬像については、一般にユスティニアヌス帝に同定する説が有力である。この他、コンスタンティヌス大帝やテオドシウス 2 世と見なす説もあったらしい。第 4 回十字軍に参加したロベール・ド・クラリーは、地元のギリシア人からこの像をヘラクレイオスのそれとする説を聞きつけており、おそらく作者ゴーティエの言説も同種の情報源に基づくものと思われる。cf. Robert de Clari, *La conquête de Constantinople*, éd., P.Lauer, p.86; Robert of Clari, *The Conquest of Constantinople*, tr. by E.H.McNeal, p.107. なお、この皇帝騎馬像に関して詳しくは、J. P. A. van der Vin, *Travellers to Greece and Constantinople. Ancient Monuments and Old Traditions in Medieval Travellers' Tales*, 2vols, Leiden, 1980, pp. 271-278 を参照。
- ¹⁰⁸ cf. M. W. Baldwin, "The Decline and Fall of Jerusalem, 1174-1189", in K.M. Setton ed., *A History of the Crusades*, vol.1, 2ed., Madison, 1969, pp.590-621, esp. pp.615-617.
- ¹⁰⁹ cf. M. Angold, *The Fourth Crusade. Event and Context*, Harlow, 2003, p.67.
- ¹¹⁰ cf. S.Painter, "The Third Crusade: Richard Lionhearted and Philip Augustus", in K.M. Setton ed., *A History of the Crusades*, vol.2, 2ed., Madison, 1969, pp.45-85, esp. p.53.
- ¹¹¹ P.W.Edbury, *The Conquest of Jerusalem and the Third Crusade. Sources in Translation*, Aldershot, 1996, p.171.
- ¹¹² H.J.Nicolson, *Chronicle of the Third Crusade. A Translation of the 'Itinerarium Peregrinorum et Gesta Regis Ricardi'*, Aldershot, 1997, p.98.
- ¹¹³ cf. A. J. Andrea ed., *Encyclopedia of the Crusades*, Westport, Conn, 2003, p.83.
- ¹¹⁴ シャンパーニュ伯の位を継承したアンリ 2 世の弟ティボー 3 世は、1199 年 11 月に十字を帯び、新たに編制される十字軍の総大将に推された。ところが彼は病に冒され、1201 年 5 月に没してしまう。しかし、トロワ司教やブリエンヌ伯ゴーティエらに率いられたシャンパーニュの軍勢は、亡き伯の従兄弟のプロワ伯ルイ (プロワ伯ティボー 5 世の息子) のそれと共に海を渡り、新たな十字軍遠征に乗り出してゆく。第 4 回十字軍である。cf. J.Longnon, *Les compagnons de Villehardouin. Recherches sur les croisés de la quatrième croisade*, Genève, 1978, pp.11-111. 1239 年にはティボー 3 世の息子で後継者のティボー 4 世が新たな十字軍の先頭に立った。cf. S.Painter, "The Crusade of Theobald of Champagne and Richard of Cornwall, 1239-1241", in K.M. Setton ed., *A History of the Crusades*, vol.2, 2ed., Madison, 1969, pp.463-485.

[付記] 本稿は平成 17 年度日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)の研究成果の一部である。